
月さえ亡い鬱ぎでも、貴女となら（最初期）

M R B

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

月さえ亡い鬱ぎでも、貴女となら（最初期）

【Nコード】

N7478C

【作者名】

MRB

【あらすじ】

これが初めて書いた小説になります。もはや黒歴史の負の遺産ですが、初心を忘れぬよう残します。あんまり読まないで>><

1・銀光と真円の祝福を（前書き）

世界を突き詰めていけば、実在するのは我が自我とその所産だけである。

その他のすべては自我の観念、又は現象にしか過ぎない。

果て無き蒼天も大海も存在しない。

私の認識可能な領域が世界のすべてであり、私の世界は私の言語の限界という分厚い壁で終わっている

ジエイダイト・スフィア
「ワタシダケノセカイ」訳

1・銀光と真円の祝福を

・ぎんこうとしんえんのしゆくふくを・

荒い呼吸、地を蹴る靴裏、弾ける汗。

冥い住宅街は出歩く人影も見当たらず、不気味なほど静まり返っていた。ただ漆黒の闇空に兀立する満月が、深夜の街に寂しげな燐光を降らせている。

連なる家々に挟まれた迷路を、俺は全力で疾駆していく。背負ったバットケースが重い。まだ十分も走ってはいないのだが、日頃何のトレーニングもしていない俺には二十分にも一時間にも感じられた。

男として情けない事この上ないが、早くも体力が限界に近い。徐々に走る速度が落ちる。膝に手をつき、貪るように呼吸する。呼吸毎に渴く口内に反比例するように、全身から粘着質な汗が吹き出てきた。爆音を奏でる心臓が集中力を掻き乱す。途切れた集中力を取り戻す為に半身を起こす、無防備になるその一瞬。視界の端を横切る影と鎖の音。

危険を知らせる信号が脳に到達するより一瞬早く、脊髄からの指令でバットケースを音の方向へ掲げる。押し倒される身体。背面から全身に伝播する鈍い衝撃。呼吸が漏れ、視界が瞬間的に白濁する。顔にかかる淀んだ吐息と、白煙を上げる合成繊維の異臭。

満月の逆光でよく見えないが、それでも神経を束ねて目を凝らすと、杭のような犬歯ががっちりとケースを固定していた。俺の顔を覗き込むもう一つの頭。もう一頭？ 最悪だ。

その姿は犬。しかし、体軀はそこらの大型犬よりさらに一回り大

大きく、重い。大人の腿ももほどもありそうな前肢まえあしは、器用もてに俺の両腕を踏みつけていた。

バットケースに噛み付いている巨犬と、俺を見据えている巨犬。俺は、何か形容し難い違和感を覚え、眼だけで闇色りんかくせんの輪郭線りんかくせんを辿っていく。黒い剛毛に覆われた首はその付け根で、一つの胴体に癒着りんかくせんしていた。今になって初めて確認した狩人の姿に、全身に驚愕以前の戦慄が奔る。

完全にマウンドポジションをとられる前に、畳んでいた右足を全霊を込めて蹴り出す！

踵は巨犬の腹部を正確に捉えた。背筋に走る、歓喜にも似た寒気。甲高い苦鳴を残し、得体の知れない恐怖はアスファルトに転がる。

奪還した四肢の自由。一部が溶けて中身が露出したケースを再び担ぎ、獵犬の姿も確認せずに俺は全力で駆け出した。

さっきの巨犬の唾液が付着した頬が焼けるように痛む。俺は唾液を洗い流すために、近場の公園に転がり込んだ。

昔、ここによく来たのを覚えている。細心の注意を払って公園中央の水飲み場まで歩き、唾液を洗い流す。ついでに喉も潤しておいた。

頬に触れると、異様な触感。軽微けいびではあるものの、唾液に触れた頬は火傷の後のように爛ただれていた。俺は巨犬に噛まれたバットケースが溶けていたのを思い出す。胃酸が何かを利用した強酸だろうか。蜘蛛女や頭が二つある犬がいるくらいだ。そいつらが酸や火を吐いても、もう驚かない。ぶっちゃけ驚きたい。

破れたケースからは、月光を反射して鈍色に輝く金属の棒が顔を覗かせていた。以前どこぞの工事現場で拾った、鋼鉄製の鉄槌パール子。

実はこの鉄槌子、指定侵入工具と見なされ、所持しているだけで法に問われる。だから、わざわざこんなものに入れて持ち運びをしているのだ。しかも、所々に黒い染みが付着しており、所持してい

るのを巡回中の警官にでも見つかるうものなら、確実に職務質問される。それだけは避けたい。

喉も潤い呼吸も落ち着いた。先の巨犬に喰らわせた蹴りはなかなか効いたようだが、いい加減追い付いてくるだろう。だが、追われっぱなしは俺の性に合わない。俺は暗い公園を見回す。公園の隅には巨大なコンクリ製のテトラポットが一つ、何故かぽつんと設置されていた。俺はその後ろに身を隠す。

この公園は浜汐公園だったか。テトラポットすら遊具として取り入れる柴賀市には、正直感服した。などと考えるほどの冷静さを取り戻したとき、ちょうど公園の入り口から低い唸りと共に双頭の巨犬が姿を表した。巨犬は俺の匂いを頼りに追っているらしく、しきりに地面に鼻を擦らせている。殊葩と合流してから片を付けたかったが、どうやらあいつは間に合いそうにない。

しかし、本当に繋がってるんだな、あの頭。見たところ、無理やり縫合したような後もなく、まるで生まれつきそうであったかのような形だ。無論、実験動物が自由を夢見て逃げ出した訳でもない。あいつは、そんな生易しいモノなんかじゃない。

双頭の巨犬は、ばたばたと涎を垂らしながら徐々にこちらに近付いてくる。涎が地面に落ちる度に、小さく白煙を上げる。

呼吸を整え、息を潜める。

動転していた先程とは打って変わって、今はいくばくかの緊張が心地良い。

全身の残虐な血が騒ぐ。

唇の両端が吊り上がっていることに気付いた。

鉄挺子をゆっくりと引き抜く。それは正に武者の抜刀。そして空になった鞘を冥い天に投擲する。それは魂を賭した一撃への布石。

合成繊維のケースが俺から見て巨犬を挟んだ位置に落下。金具が深夜の静謐には仰々（ぎょうぎょう）しい音を立てる。

双頭の巨犬が背後に気を取られるより数瞬早く、俺は影よりも密やかに岩肌を駆け上り、遙か上空の真円を背に跳躍。

四つの瞳が俺の影に気付く。遅い。
俺は全身の筋力を先端に束ね、巨犬の頭蓋ずがいに銀光を振り下ろした。

2・寧日は小止み無く息衝く

・ねいじつはおやみなくいきづく・

県立柴賀東高校。さいがひがし

左右のカーテンの継ぎ目から、日光がピンポイントで俺だけを狙ってくる。シモ・ヘイへも真つ青な正確さの日光に、彼岸の向こう側まで強制退去させられそうだ。

俺は舌先まで這い上がってきた欠伸を噛み殺す。ああ眠い……。隠れて読んでいた愛読書から目を離すと、乱雑な文字で埋められた黒板が目に入った。絵心と話術が根絶された退屈なだけの授業も、俺にとっては拷問に匹敵する。

教卓上方、スピーカーの下にある時計によると、現在九時二十三分。今秒針が真上を指したので二十四分。授業終了まであと六十秒時よ、今だけ倍速で動け、と念じてみる。当たり前だが何も起きない。

最後まででも真面目に授業を受けようかと愛読書を仕舞い、のろのろとノートを開く。シャーペンを握ったところで授業終了の予鈴号令。

俺は持参していたクリップでカーテンの位置を整える。これで次の授業からは、あの眠気を誘う日光から解放されるだろう。椅子に腰を降ろし、眼鏡を外す。無気力に机に伏せると、突然両肩に鈍い痛み。何かが肩に食い込んできた。背後から女子の声。

「月曜から相変わらずだなあ、授業いたずらくらい真面目に聞けば？」

顔は見えないが、よく知った悪戯いたずらっ子のような声は、楠だ。って痛い重い痛い！

「痛だだだ！ 肘に体重をかけるな！」

「えー、そんなに強くしてるつもりはないんだけどなー」

「いや、あの、楠逢香サン？ 肘が、肘、ちょっと、退けてっ」

楠の肘が僧帽筋に刺さって地味に痛い。右隣の席に居るはずの我が同朋、樋口に助けを求めるが、居ねえ。絶望に暮れていると、また別の女子の声。

「おはよう河野君、って二人ともホント仲いいよね」

悪戯の意志が満ち満ちた楠のそれとは対照的な、鈴のような声。

その方向に首を捻ると、真夏の海と青空が似合いそうな、笑顔の似合う顔の片岸がいた。一方で、梅雨季の濁った池と灰色の曇天が似合いそう、死んだ魚のような目が印象的な顔の俺は、声の主の片岸綾菜に挨拶を返しておく。

「あ、片岸さんおはよ。あの、眼鏡の度が合っていないようだけど、いい医者を紹介しようか？」

「酷いなー圭ちゃーん」

拗ねるような台詞が降ってくるが、正義的に無視。背筋に力を入れて上半身を起こすと、軽い女の肘は呆気なく退かされた。微妙に痛みが残る肩を揉みほぐしながら、ふたりを交互に見る。

「で、何の用？ 借りてた百円は、ひと月以上前に返したはずだし。あ、もしかして、俺の隠れた魅力に気が付いたとか？」

「んな訳あるか。単に次の授業が教室移動だから、お前が寝過ぎさないようにしてあげたの。感謝しろよ」

捻っていた半身を戻し、黒板の一角を確認する。いつの間にか、授業の時間割振が変更されていたようだ。今朝通学してからまともに黒板を見ていない俺が気付くはずもない。いや、授業すら聞いてなかった俺が悪いんだけども。

よく見なくとも、二人は次の授業の教科書とノート、筆記具を持つている。どうやら、俺は危うく置いてけぼりにされるところだったらしい。次の授業の理科は選択科目によって移動する者と、この教室に残る者に分かれる。どうやらうつかり置いていかれるところ

だったらしい。

「ん、まあ、アレだ。ありがと」

「いえいえ。感謝して敬え^{うやま}」

「断る」

言いながら机から教科書と資料集を引つ張り出し、荷物をまとめ始める。

既に廊下まで出ていた楠と片岸に、早く来いと急かされ、荷物を抱えて小走りで駆けだした。低血圧なんだから朝方は走らせるなよと、この際低血圧が朝に弱いということに医学的な根拠が無いことは敢えて握り潰しておく。

そういえば、次の授業で俺が不在なら、陽光を遮るためのクリップも肩透かしを食らった気分ではなかるうか。ふと閃き、数歩戻ってクリップを外してカーテンの位置を適当にズラす。俺以外の誰かも陽光の洗礼を受けるがいい。けけけ。

俺は楠と片岸に追い付き、適当に会話を楽しみながらリノリウム貼りの廊下を歩いていく。

吹き抜ける若草の香りの風が、カーテンの衣装を纏い、睡魔を攫って蒼い空へと流れていった。

午後三時十分、本日最後の授業は定刻通りに終了。

教室ではあちこちで伸びや欠伸をする生徒が現れ始める。俺、河野圭輔^{けいすけ}もそんな一人だった。やんわりと滲んだ汗をスポーツタオルで拭い、ペットボトルの飲料を口に含む。脱力していると、不意に覇気の絶滅した呼吸がもれた。

周りの連中が清掃モードへ移行し始めたため、俺もそそくさと授業の後片付けを終わらせる。教科書やノートを詰め込んだ鞆を肩に担いで、机を移動させてから教室を後にする。

「ありや、今日はもう帰るの？ 掃除は？」

廊下で自転車の鍵を取り出そうと鞆を漁っていると、箒を持った

楠遥香に呼び止められた。

「ん、今は途中のオンラインゲームがあるのでね、今日は帰る。ちなみに今週は俺、非番なのだよ」

ハルはふうん、と一言。

「ま、俺の分も頑張ってくれたまえ。そうだ、特にお前の歩いた跡を丁寧に掃いておけよ。放っておくと虫が湧くからな」

「はいはい、つて私は自分の尻尾を追い掛けて回転する犬か。あと私の内履きは樹液製か」

「自身が腐臭を発しているという発想は？」

「ああ、なるほど。死ね」

「で、俺に何か用なの？」

「ああ、お母さんが夕食にお前を誘つとけ、と。用事があるなら無理強いはいしないけどサ」

今夜とはまた急な……。まあ、いつもの事だからもう慣れたけど。

「んー、じゃあ、お言葉に甘えて今夜はご馳走になるのかな。晩飯用意する手間が省けるしね」

「了解。伝えとくよ」

俺と楠はしばらく談笑していたが、掃除のサボりと思われるのも嫌なので会話を適当なところで切り上げ、楠と別れた。

駐輪場に向かう間、俺はなんとなく考えてみる。俺と楠との会話はいつもこんな感じだ。高校生らしい恋愛感情なぞありやしねえ。

俺もあいつに特別な感情は抱いていない。『女らしさ』とかいう概念が原子崩壊したハルに恋をしる、というのも無理な話かもしれないが、あいつはアレで彼氏持ちなのだ。納得できぬ。

まあ、俺とあいつとの関係を無理矢理言葉にするなら、老夫婦と言った感じだろうか。

しかし、教室から自転車の鍵を探し続けているが見当たらない。ちよつぴり途方に暮れながら駐輪場までたどり着くと、鍵は自転車に刺さったままだった。

なんか、どつと疲れた。

俺はケータイにイヤホンを接続し、自転車に跨る。指でケータイを操作して、詩人兼歌手であるジエイダイト・スフィアの『ワタシダケノセカイ』を再生。クラシック調の洒落たメロディーと、世界への反骨心に満ちた英語の歌詞が心地良い。

家に着いたら楠家の夕食の時間まで、オンラインの誰かをテキストに誘って、竜を狩りに行こう。そんな事を考えていると、唇が勝手に歌詞を紡いでいた。

『……Existence is only my own ego and the product, provided that I contemplate the world.

There is of the world no more than the ego's sense of phenomenon.

There is the endless blue sky nor the bottomless pitch black ocean.

The discernible domain is the end of my own world, that is to say, it continues only until Dead End of my understanding and ability.
『……』

「それでえ、その男が言うわけえ」「オイ、俺の箸返せコラ」「単純な授業のつまらなさなら世界史の西沢もなかなかだぜ」「それって噂の通り魔の話?」「いや待て、怖い話なら柴賀東校の七つの七不思議ってヤツを」「うん、噂だと大昔の落武者の幽霊だとか」「四十九コも有るのかよ! 無駄に多っ!」「っーか、体育のあの夕コ、マジでウザいんですけど」

女子の黄色い声や、罵声ははせいが飛び交う昼休み。静かなランチタイムを楽しみたい俺にとっては鬱陶しい限りだ。最初から諦めているが、ちよっぴり自暴自棄になりながら、コンビニの唐揚げ弁当を箸でつつく。どうでもいいけど、揚げ物って揚げたてだよなやつぱり。

女子の話は痴漢と通り魔の話から、近県で多発している轢ひき逃げ事件の話に華麗にシフトしていた。いつ見ても女子は話題には困らなさそうだ。

「それで、お隣の家のコロンちゃんとメロンちゃんが、って圭ちゃん私の話聞いている?」

「聞いてないし聞く気もない」

俺は机の向かい側の楠に即答する。一瞬の間も置かず楠の疾風の肘鉄ひじてつが接近。俺は半身を逸らして軽やかに回避。楠の隣の片岸が、俺と楠の一連の攻防に目を丸くしていた。いつもの事なんです。本当に気にしないでください。

「で、お隣さんの犬がなんだって?」

「ちゃんと聞いてたんじゃん。ま、いいや。その子、二頭ともグレートピレニーズなんだけどね。ほら、あのでっかいやつ? 散歩とか大変なんだって」

楠はその犬の事を話し続けている。俺はそれを適当に聞き流し続けている。窓の外では、葉桜が柔らかい風に吹かれて揺れていた。俺は我慢できなくなって欠伸あくびを漏らす。

「あれ、そういえば今日は珍しくコンビニの弁当なんだ？」

「ああ、今朝はちよつと寝坊しちゃってね。作ってる時間が無かったんだよ」

楠が俺の弁当に気付いて、話題を振ってきた。俺は外に目を向けたまま、楠に返す。

「あれ、河野君って自分でお弁当を作ってるの？」

「片岸さんは知らなかったか？ 基本的に俺は自炊してます。これでも、一人暮らし歴が長いからね」

俺の話に片岸は関心したような顔をしていた。表情には出さないが、俺は微妙に嬉しくなる。好意が有ろうと無かろうと、女に誉められればそりゃ嬉しい。

「河野君のお弁当って、いつも美味しそうなんだよね。料理の出来る男の人ってなんか良いな。ハルちゃんはその思わない？」

「コイツをあまり誉めない方がいいよ。ホラ、もう天狗てんぐになつてきてる。そもそも、なんで今朝は寝坊しちゃったのかな？ また夜遅くまで怪しいサイト巡り？」

「お前は、せつかく上昇した俺の株を急降下させるなよ」

片岸さんも片岸さんで、そいつの言うことを何でも真に受けないでお願いだから。

「しかしまたとは何だまたとは。ほら、例のオンラインゲームだよ。チャットとかの設備も整っててさ。狩猟仲間と交流を深めて道具を交換したり、一緒に竜を狩ったりいろいろできるんだよ」

「楽しいの？ それ。私はゲームとかしないからなあ……」

「ゲーム音痴のお前に説明してやるのも勿体無い気もするが、一言にゲームと言ってもアクションからRPG、シミュレーションやアーケードまで幅広いんだぜ。最近は携帯ゲーム機でも『狩猟生活』が発売されたし、ああ『狩猟生活』ってのは俺がこの間からやっているオンラインゲームね。そのシリーズなんだよ」

「あー、ハイハイハイハイ。要するに、夜更かししてゲームしたから寝坊したと？」

「俺としては『超機神戦争』シリーズみたいなシミュレーションも嫌いじゃないんだけどね。黒い鎧竜が堅くて堅くて。一匹狩るのに三回も死んじゃったよ。まさに刃が立たないってやつ?」

「H A H A H Aと俺はアメリカンに笑う。片岸はもはや完全について来れていない。ちよつと熱くなりすぎたか。」

俺は立ち上がったって、空になった弁当箱の容器を捨てに行く。再び席まで戻ると、二人とも弁当箱を片付けていた。

「片岸さん、午後一番の授業は何だったっけ?」

「ええと、時間割の変更は無かったはずだから古典だよ。今日は私が板書しなきゃいけないから。河野君は予習してきた?」

「ああ、春の日差しが気持ちいい! 片岸さん、そんな真面目なことばかり考えていたらお腹が空きますよ」

「お前が不真面目過ぎるんだよ」

片岸が手を当てる小さな欠伸をした。それが楠、俺へと感染し、揃って口に手を当てる。午後からの授業まではまだ時間がある。それまで何をしようか。片岸は参考書を手にも、次の授業の板書をしていった。小綺麗な漢字の羅列が黒板に並べられていく。

「そういえば、今週末は三連休のはずだ。だからと言って、特に予定は無い。コレだから独り身は寂しい。」

「圭兄けいにいはいつも退屈そうだな」

「圭兄言うな」

俺は楠に向き直る。本人は気付いているか知らないが、こいつが俺の事をそう呼ぶときは何かしら議論なり悪戯なりをふっかけてくる時だ。要するにコイツも暇なのだろう。まあ、俺も暇だし、相手になつてやってもいい。

「なんとなく思ったんだけど、寝不足の原因って本当はゲームじゃなくて、チャットの方じゃないの?」

「ほう、まあ別に隠すような事でもないか。」

「まーねー。一昨日の月曜日、お前んちでご馳走になった日からね。そのオンラインゲームでカズって奴と知り合ってたね、仲良くなって、

いろいろと相談された。現代っ子特有の、生臭い悩みだったよ」

「圭兄、お前はまた厄介事に顔を突っ込んでるんじゃないんだろうな？」

「おいおい、俺だってもう十八だぜ？ 退き際くらいちゃんと自分で見極められるっての。それとも何だ、俺の事がそんなに心配？」

俺は母親のような態度をとる楠を鬱陶うつとうしく思い、話題の転換を図る。が、楠は俺を見詰め続けていた。

「話を逸らすな。そんなんだから、お前はいつまでも経っても心配なんだ」

「俺のことより自分のことを少しは気にしろ。お前、彼氏アイツと上手くいってるのか？」

「ぐ、私のことは今はいい。話を逸らすなって」

俺と楠の間に不穏ふおんな空気が流れる。周りで話していた何人かが、その雰囲気を察知して席を立った。何か言い返そうかと思っただが、どこまでもその通りで、続く言葉が出て来ない。

俺が楠にチャットでの事を少しでも話した以上、こいつの中では既に無関係ではなくなってしまう。楠がこう言ってくる事は予想できたはずだ。俺が本当に楠を巻き込みたくないのなら、こいつが怪しんだ時点で否定しておくべきだった。

チャットでの話題は、できるだけ避けたつもりだったが、楠に感づかれて、結局心配されている。今までも、俺の気付かない所で、こいつは俺を心配していたのかもしれない。まったく、どこまでもお人好しな女だ。

「でも、お前が言うほど俺はガキじゃない。退き際を見誤るほど、俺も無思慮じゃないしね」

楠に少しの笑みと安心が滲む。

「でも、いくら日常の生活が退屈だからといって、電子一粒程度の繋がりしかない所にまで手を伸ばすのは感心しない。お前が厄介事、もとい他人の相談事に首を突っ込みたがるのは、その退屈を消し去りたいからだろう？」

「当たらずとも遠からず、かな。十九世紀のとあるおっさんが言っていた言葉、『退屈は悪の根源であって、遠ざけねばならないものである』だったかな。退屈とは行動できるにもかかわらず、行動しないことである。退屈であり続けることは精神の死を意味し、人間としての死を意味する、ってね」

「それで、何が言いたいの？」

「ええと、俺にはこのおっさんが言いたかった本当の意味は分からない。こういう分野で字面以上のことを理解しようとしたら、文章を咀嚼して飲み込んだ上で、自分なりの結論が必要になってくるからね。」

「つとずいぶん脱線したな。つまり、俺にとって退屈って言うのは忌むべき物であって、回避しなければならぬ物なんだよね」

「でも現にお前は退屈なんだろう？」

俺は真つ直ぐすぎる楠の言葉に嘆息を漏らす。

「そうなんだよね。大嫌いで見るのも嫌なはずの退屈は、気が付いたらいつの間にかそこに居て、俺の体内に毒を撒き散らす。その毒に俺は息苦しくなって、苛立ってくる。潤うるつことのない喉の渴きに俺はそういつまでも耐えられない」

「そういう気持ちは私にはよく分からないけど」と言っ、楠は続ける。

「責任も持てない癖に、手当たり次第に厄介事を引き受けるのはただの偽善者だよ。不思議や、非日常との遭遇、画面や銀幕ぎんまくの向こう側に入れ込む事で、現実から逃避するのが悪いとは言わない。けど、お前の場合、どうもそれが過ぎる感があるからね。わかってるんなら、私に言える事は無いけどサ。それでも結構心配してるんだよ、圭兄」

圭兄と言つなと何度言えは……もういいや。

「お前こそ、心配し過ぎなんだよ。もつと肩の力を抜け。そんなに力を入れていては、胸に集まるはずの脂肪も集まらないぞッ」

俺は眉間に正確に迫ってくる拳を手の甲で軌道をズラす。続く蹴

りも椅子に座ったまま屈かがんで回避。わーい、白。

「畜生があ！ 何故当たらん！」

「ふはははは！ 空手、剣道、柔道の各師範に筋が良いと言われた俺を嘗めるな！」

「筋が良いって言われてるのに、何で三つとも辞めるんだよ？」

「えー、だつて空手は痛いしー」

「剣道は？」

「臭いから」

「柔道は？」

「ムサイから」

「……」

「……」

楠の顔には強張った笑みが張り付いている。ちなみに、眼はまったく笑っていない。

「そんなんだから貧乳ツンデレと……」

「うるせえええ！」

あ、良い踏み込み。

鈍い音と共に、俺の顔面は机に叩き付けられた。

いやあ、今の踵落かかととしては高得点ですよ。河野さん。そうですね。生だと思っていたのが実はスパツツだったのが残念ですね。河野さん。あとすごく痛い。

昼休み終了の予鈴が鳴り、息を切らした楠が去っていく音が聞こえた。

今のは、楠なりの心配の表れなのだろう。そう思いたい。うん。多分。おそらくは。

次は俺の嫌いな古典だし、授業の前半はこのまま寝ていよう。日差しが気持ちいいし。絶好のお昼寝日和だ。

それにしても額が痛い。俺が心配なら手加減しろよ、あいつ。

ああ、そういえば、今日は明日からの新入部員勧誘の作戦会議があるんだ。うわあ、メンドー。

教師が教室に入ってくる足音が聞こえたが気にせず、放課後の作戦会議に向けて体力を温存すべく、俺はそのまま瞼を閉じた。

ほとんどの連中が部活に行っちゃい、残って課題を進めている者や世間話をする者で三年三組の教室は閑散としていた。

「ハル、ちよつといいか？」

「別にいいけど、圭ちゃん、部活は？」

「俺の担当だった一年生の学年集会での部の紹介文は、昨日一昨日で仕上げたからな。学年集会まではまだ時間があるし、今日の俺はフリーなのさ」

本当なら今日の放課後を利用して、部の紹介文を書き上げるつもりだったのだが、気になる事が有ったので昨日のうちに自宅で完成させておいたのだ。今は丁度、紹介文の原稿を顧問の教師に渡し、OKを貰って来たところ。

「お前にちよつと頼みたい事があってね。例のチャットでのことだよ」

「ああ、例の。で、何？」

「ここじゃ何だから、少し屋上まで付き合え」

「んー、時間が掛かるなら先に職員室に行ってきていい？ 今日までの課題、出してくるから」

「わかった。じゃあ、先に行って待ってるからな。ちゃんと来いよ？」

楠は伸びをして立ち上がり、職員室に向かって行った。

視線を感じて振り向くと、周りの女子と目が合い、逸らされた。さつきから俺と楠の会話に聞き耳を立てていたらしい。学校の屋上が告白スポットと言うのは定番だしね。うん、俺には縁のない話。変な噂が立たないといいけど。

まあ、そうだったら、それはそれで面白い。極端な事を言っしまえば、俺はこの退屈さえ殺せればそれでいいのだ。俺が見付けた

のは、非日常の欠片^{カケラ}。それは日常を薄く裂く鋭利な硝子片^{ガラスへん}。例えそれを掴むことで、己の手を傷付けてしまうのも存外悪くない。左手で吊り上がった唇の端^はに触れる。

淡い期待を抱きつつ、俺は壊れたままになっっている屋上への扉に手をかける。

4日前

「ただいま帰りましたよっ」と

ケータイで時間を確認すると、現在時刻は十五時五十分。学校を出たのが二十分だったはずなので、所要時間は三十分。まずまずのタイム。

「おかえりなさい」の無い帰宅も、俺の日常の一つだ。庭付き一戸建てのこの家には、今は俺しか住んでいない。

父は俺が小さい頃、母と離婚している。今は東京だか京都だかで別の家庭を持つているらしい。自分や母に苦勞をかける父を憎んだ時期もあったが、過ぎた事をとにかく言っても仕方がないし、二人とも話し合った結果なのだから、俺に口を挟む権利はない。それに、向こうの家族が幸せならそれでいいと思う。

母はいつも出張や単身赴任で家に居ることの方が少ない。事実上、俺は一人暮らしなのだ。一人暮らしを始めた当初は不安もあった。今でも寂しくないと言えば嘘になる。でも、生活費には困っていないし、母親の古い馴染みである楠のおばさんが今日のように夕食に誘ってくれることもある。それに、色々な面で「FREEDOM」(フリーダム!)なのはこの年頃の俺には魅力だった。そういう訳で、俺は一人暮らしを満喫していたりする。

PCを起動させる。ネクタイを緩めて制服を脱ぎ捨て、Tシャツとジーンズのラフな格好に着替えた。デスクトップから今流行りの

オンラインゲーム『狩猟生活』を起動させる。

……無駄な時間が流れる……。

軽い効果音、続いてゲームのBGMが流れ始めた。頭の上にZyグムントgmountと名前が浮かぶマイキャラを操作し、オンラインの集会所へ移動。適当なクエストを発注する。せつかくのオンラインなので、他のプレイヤーをクエストに誘おうと、カメラを回転させて探す。見つけ。俺のジグと同じように、Ka^{カス}zと名前が浮かぶキャラに話し掛け、メッセージャーを起動させた。

「始めまして、一緒にクエストいきませんか、っと」

……返事が来ない。プレイヤーがPCの前を離れているのか、そのキャラ自身動いていなかった。

「お、返信着た」

甲冑を着込んだKa^{カス}zが動き、画面に『始めまして』。いいですな、俺も火竜素材が欲しかったんですよ』と表示された。よし、一緒に戦う強敵^{とち}がまた一人誕生した。

時計を見て時間を確認。楠家との夕食までは、まだ随分と時間がある。それまでは竜狩りで適当に時間を潰そう。

俺は肩を回し、妙に気合いを入れた。

「とまあ、そんな感じで知り合って、次の日も一緒に狩りに行って、昨日いきなり相談された」

「そんな件^{くだり}はいいから、私は何をすればいいの？」

「む、相談された内容は聞かないのか？」

フェンスに寄りかかったまま、楠は言った。

「聞いていいなら聞くけど、わざわざ屋上で話すくらいだから、あんまり深くは首を突っ込まない方がいいかな、と」

俺は楠の隣のフェンスに背中を預ける。夕日が眩しい。

「隣のクラスに、少し前から学校に来てない女子が居るだろ、名前は忘れたけど、確か、藤田？ 藤井？ 違う」

「もしかして、藤原さん？」

「そう、藤原だ藤原惟^{ふじわらゆい}。友達？」

「ううん、何回か話した事があるだけ。クラスが一緒になったことは無いよ」

「まあ、その藤原がここ三週間くらい学校に来ていないらしいんだが」

それは一旦置いて、と繋げる。

「本題に戻る。もうこの際だから言っちゃおう。チャットのKa zって奴にされた相談の内容を端的にまとめるとだな、そいつには小中高と一緒だった幼馴染の女の子がいるらしい」

「幼馴染、ね……」

「そ。いつも自分を慕って隣にいてくれる半分妹みたいな存在だなあー、俺も掃除洗濯料理に片付けまでしてくれる素直な娘が欲しい」

「お前にも居るだろ、妹。お前のおじさんの、樹ちゃん^{いっちゃん}だっけ」

アレは……むう、確かに妹ではあるが……。血縁関係は全く無い、親父の再婚相手が連れていた娘だ。歳も俺と一つ二つしか違わない。だから、正確には妹どころか赤の他人。実際に会ったことも、一度きりだ。その際、当時10歳だった俺は異常なほど懐かれてしまったのだ。顔を合わせる毎にプチ鬱になるくらい。

「アイツの事はいいよ。つと、どこまで話したっけ。ああ、そうそう。そして成長すると共に、募っていく想い。そしてある日、彼は思い切って告白した」

「幼馴染に妹で……それ何てエロゲ？」

「知るか。彼は絶対に彼女がOKしてくれると思っていただけだろうな。お前の言うようなゲームや漫画の世界なら、ここで晴れてカッブル誕生、となるんだろうが、でも現実^{じつじ}は違った」

俺は慎重に言葉を選びながら続ける。

「彼女は彼の告白に答えなかった。むしろ、彼女はこう思ってたんじゃないかな？」

『いい友達だと思っていたのに、どうして？』ってね。

まあ、彼女にとっては信頼していた人間から裏切られたようなものだからな。そう思ってしまうのも無理は無い。でもココからが問題。その返事を聞いて動転した彼は彼女に乱暴してしまった」

「乱暴？」

「んー、俺も詳しくは聞いてないんだけど、ああ、飽くまでもココからは俺の予想なんだが、おしべとめしべ云々ってところじゃないかな」

楠はエグいモノを食べたような顔。なかなか愉快。

「そして彼女は塞ぎ込んでしまった、と。ああ、余談だけど、生物学の統計では幼児期から長期間一緒に過ごした個体同士は、恋愛関係になりにくいんだってさ。コレは人間にも当てはまるそう。統計には例外が存在するっていういい例かな、今回は。しかし本当にどうでもいい話だったな、すまん」

「つまり、お前の言いたいことは、その彼女イコル藤原さん、だと？根拠は？」

「さすが、察しが良いな。その件が起こったのが今から三週間前。藤原惟が学校に来なくなったのも、おおよそ三週間前。あと、全国を探しても、この学校のように屋上が解放されている学校は少ない。この学校だって、半分非合法みたいなモンだしな。で、事が起こったのも、学校の屋上らしい。時期といい環境といい、ほぼ合致する」

「あのね、圭兄、私はあんまりネットやゲームには詳しくないけど、そのゲームってというのは今流行ってるんでしょ？ 日本全国のお前みたいな奴が集まる、顔の見えないネット上で、そんな偶然が成り立つ可能性つてのは限り無く0に近いんじゃない？ それに、そんな話や噂も全然聞かないけど？」

俺は夕日に背を向け、フェンスの向こうに在る柴賀市を見渡す。

「それでも構わないさ。そんな、他人からしてみれば『下らない』」

の一言に尽きるような出来事でも、俺の退屈を一瞬でも忘れさせてくれるなら、俺はその一瞬を体感するためにどんな時間の浪費も厭われない。自分で言うのもなんだが、日々を退屈だと言って何もしい、そんな退屈な人間に俺はなりたくない。やり方が分からなくてもいい。幸い、俺には時間だけは腐るほどある」

「私達は今年度受験なんだけど？」

俺は心底嫌な顔をしたと思う。

「俺の我が儘だつてのは分かっている。でも、俺には、今この瞬間が全てなんだよ。その連続が歴史や記憶つてモノなんだし。bestじゃなくてbetterを目指す、そうすれば必然的にその時々のも最良になっていく、ハズ。さっきも言ったけど、他人がバカらしく思つて実行しないようなことでも、俺はやつてみたいんだよ」

「……で、私は一体何をすれば？」

「嫌なら無理して付き合わなくていいんだぞ」

「乗りかかった船だよ。それに、お前を野放しにしておくのは不安だし、心配。いろんな意味でね」

「……悪いな」

「いつもの事だからね」

いい加減冷えてきたので、楠に手短に話す。

確かに、偶然に知り合ったKa・zやその幼馴染が、この学校の生徒である可能性は限り無く低い。それに、一連の話がKa・zの狂言だという選択肢も、無いわけではない。そんな状況に置かれている人間が、オンラインゲームをするような心理状態にあつたのか、という疑問も残る。

俺は探偵ではないし、善意でこんな事に首を突っ込むほど、お人好しでもない。むしろ、自分が満足するためだけに行動している、利己的な人間なのだろう。

時はゆっくりと、夕焼けの空に紺の帳を降ろそうとしていた。

街灯も無く、月の光も届かない暗く静かな路地。 人気も無い。

「畜生、マジかよ……」

リュックを背負った男が血塗れの脚を押さえ、苦痛に顔を歪ませながら歩く。動く度に血が垂れ、湿った土に黒い染みを作った。

「う、ウソだろ、行き止まり?」

背後で金属が擦れ合う音。男が振り返る。

目の前、遙か遠くに月が浮かんでいた。世界が揺れ、痩せた月が落ちてきた。否、男がその意志とは裏腹に、天を仰いでいた。バランスを失い、男が背中から倒れる。否、倒れていたのは男の腰より上のみであり、その両脚は未だ地に立っていた。

痛みが無い浮遊間。背中でプラスチックのケージが潰され、割れる感触。

残された半身から噴き出す多量の血液。

その先に見えたのは甲冑を纏った瘦身。踊る長い白髪の間から、面の角飾りが覗いていた。

潰れた背囊から何かが這い出していく。

男は、元同僚から聞いた話を思い出していた。法治国家の現代、人知れず断罪の剣を振るう辻切りがいると。時代錯誤もいいところだ。その時は、オカルト好きな元同僚の吹聴する都市伝説の一つだと思い、相手にしなかった。だが、現にそいつは居た。

そして男は理解した。自分はその都市伝説に殺されたのだと。

男は、自分が殺された理由を霞む思考で、必死に考えていた。だが答えが見付かるより早く、視界が闇に包まれていった。

3・日々は微睡むように

・ひびはまどろむように・

ドアを叩く堅い音で目が覚めた。

暗くぼやけた天井が視界に広がる。そうだ、此処は私の部屋だ。目が痛い。何日も何日も泣き続けていた目は赤く充血しているだろう。

不安げな声で私の名前を呼ぶお母さんの声が遠くに聞こえる。

「ごめんなさい、お母さん。心配しないで」と、私はパサパサに乾いた唇を動かす。でも、口から出たのは掠れた空気音だけだった。お母さんが去っていく振動が、フローリングの床を通して嫌に響く。今日は四月の何日だろうか。もう曜日の感覚も無い。

どうして、どうして？

親友だって、思ってたのに……。

頭に優しげに笑う彼が思い起こされる。同時に込み上げてくる、熱い涙と掠れた嗚咽。

友達があまりいなかった私にとって、それだけ彼の存在は大きかった。あの日、学校の屋上で彼に告白されたとき、後頭部をバツトで殴られたような、そんなショックを受けた。実際に何回も殴られたけど、そういうのとは違う、心に深い亀裂が走ったような痛み。それは、あれから何週間も経った今でも、私の下腹部に鈍い疼きになつて残っている。

そういえば、あれからまともに食事もしていないな。でも、不思議とお腹は空いていない。大声で泣き続けて、頭が割れるように痛いのも、食欲を妨げているのかもしれない。

もう、そんなことはどうでもよかった。信じていた人に裏切られて、傷つけられて、私はこれからどうやって生きていけばいいの……？

私の世界の大半を埋めていた彼は、私を拒絶した。また嗚咽が漏れる。枕に熱い沁みが広がっていく。沸き上がってくる嫌悪感と吐き気。私は我慢できなくなって、近くのごみ箱の中に胃液すら出ない嘔吐を繰り返す。涙と涎で顔がぐしゃぐしゃだ。何回も、このままじゃダメだと思って、部屋を出ようとした。でも、その度に言いようのない吐き気と頭痛と悪寒に襲われて、再び部屋の中に戻ってしまう。

私が辛いとき、いつもさりげなく私を庇ってくれていた彼。春にはまた一緒にクラスだねと手を取り合って喜んだり、一昨年おととしの夏には甲子園出場が叶わずに落ち込む彼と一緒に水族館へ行ったり、秋には学校祭の準備で顔に絵の具を塗りたくられたり塗り返したり、冬には一緒に雪だるまを作ったり……。そんな楽しかったはずの思い出が、全て汚けがらわしいモノに変わってしまったような気がして……。立ち直ろうと思いついた楽しかった記憶は結局、私は一人では何もできない、彼が居なければ何もできないという、彼の存在感の大きさを再確認するだけだった。

もう、何も信じられない。怖い怖い怖い怖い怖い怖い！自殺しようかとも考えた。ヒーターに残っていた灯油のタンクも引つ張りだしてみたものの、お母さんやお父さんに迷惑をかけることは、絶対にできない。

……ねえ、誰か教えてよ……。私は、一体どうすればいいの？
誰か、誰か……。

私の心に沁えるように下腹部が疼く。

「……あ、え？」

間抜けな声が出た。私ってこんな声だったっけ。

不思議と、今までの吐き気も、頭痛も、悪寒も、潮のように退いていくのが分かった。下腹部の疼きが、脊髄を伝わって私の脳に直

接語りかけて来るような錯覚。うつん、錯覚なんかじゃない。これは、そんなぼやけたモノじゃない。暖かい、身体の奥から隅々まで満ち足りる感覚。私が今まで経験したことのない感覚。

自分でもよく分からないけど、私は私のお腹の中の、新しい命を体感していた。

動揺はしていない。こんなに落ち着いた気持ちになれたのは、そうだ、彼の傍に居たとき以来だ。私は自然と、この子は絶対に死なせてはならないと強く感じていた。誰に何と言われようと、この子を幸せにしてやらなければならない。彼に裏切られてしまった今、私にはこの子が世界の全てなのだから。

んん、これが母性愛とかいうものなのかな？

でも、この子を産んで育てる事を私の両親は許してくれるのだろうか？ いや、絶対に許さない。お父さんもお母さんも、悪い人ではないんだけど、言ってしまうえばカタブツだ。世間体せけんていも気にするだろうし、その次の言葉は……想像するのも恐ろしい。だからといって、私独りでこの子を育てられるか、と言われたら、無理だろう。

……ああ、そつだ。

社会や環境が、お父さんやお母さんが私とこの子を拒絶するなら、絶対に誰にも拒絶されない、誰にも裏切られない、誰にも邪魔されない、そんな世界を自分で作ってしまえばいいんだ。

お腹の奥、子宮で命が疼く。この子も喜んでいるみたい。

時計を見ると、もう夕方だった。そうと決まれば、善は急げだね。だんだんいつものペースを取り戻してきたらしい。なんだか身体も軽い。

微かに聞こえるチャイムの音。誰かが家に来たみたいだ。

階段を登ってくる、お母さんともう一人の足音は、私の部屋の前で止まった。

ドアを叩く硬質な音で、私は現実を引き戻される。

「ゆ、惟、元気、か……？」

聞こえてきたのは、意外な声。ここしばらく聞いていなかった、優しい声。

全身の筋肉が固まる。

ドアノブが捻られ、暗い部屋に入ってきたのは、紛れもない、彼だった。

「わあーい。明日から黄金週間だー。振り替え休日ってすごく得した気分だよー。そう思いませんか、片岸さん？」

「その割には河野君、あんまり嬉しそうじゃないけど、どうしたの？」

無垢な瞳が真っ直ぐに俺を見詰める。止めろっ、そんな汚れの無い眼で俺を見ないでくれ。

「はっはっは。全日フリーな俺を笑ってくれよう。連休だっていうのに1つも予定が無いのはあまりに悲しすぎるぜ」

どうリアクションすれば良いのか悩んでいるのなら、いつそ指を指して笑い転げてくれ。そのほうがいくらかは救われる。

「うーん、女の子じゃなくても、男の子と遊べば良いんじゃないかな？ ほら、澤江君だっけ、時々河野君が話してる、別の学校のお友達」

「その心遣い、俺の心に染み入るよ……。でもね、あいつもあいつで、元生徒会長である彼女さんと出掛けるんだとさ。澤江さわえの分際で、家族公認の一泊二日の温泉旅行だよ。そして俺は独り、おいてけぼりboy。俺も彼女欲しーよう」

教室の机に伏したまま、目が合う。

「そっうえば、片岸さんって彼氏いないよな。良かったらお……」

「それはパス」

「即答なの!？」

「えー、だって告白されるならもう少し雰囲気欲しいよ。それに、私にも相手を選ぶ権利があるでしょ？」

裏を返せば雰囲気があればOKとも受け取ることができが、後半で非の打ち所のない完全否定。俺のハートに深々と突き刺さる鋼の槍。しかも返しがあつて抜けやしねえ。

多分、片岸にはまったく悪気は無いのだろう。先の言葉にも、その言葉以上の意味はない、筈だ。俺はただ苦笑いするしかない。泣いていいか？

「2人で何の話してるんだよ、一体……」

教室に入ってきたのは呆れ顔の楠。

「いようハル、俺達2人、独り者同盟は、この黄金週間に街でイチヤつくバカツポウを撲滅するための計画を練っていたのだ。お前も攻撃対象だから、夜道は背後に気を付けて歩くがいい」

「え、二人？」

片岸が首を傾げる。楠なら「なんでバカツプルだけネイティブなはつおんななんだよ」とツツコんでくれるのに。んもう、これだから天然っ娘は!

「そついえばハル、例の件は？」

「こんな所でんな話をするなよ。昨日の今日で調べられる訳がないだろうが、ん、送信完了」

言いつつも、楠がケータイを取り出し操作。俺のポケットが震える。楠からのメールが着信していた。添付されていた画像データを受信する。出てきたのは野球野郎の写真。見事な五分刈だ。本文には一言だけ『三年二組・浅間研明』と表示されていた。

「……こいつは？」

「クラスと名前を見ればわかるだろう。例の娘と仲が良かった奴だよ。すぐにわかった」

「なるほどね。こいつなら何か知ってるってか」

最初から素直に言えばいいものを。そういうところがツンデレと言われる原因なのだということは、多分本人は気付いていない。楠は他のクラスの友人に、中学校時代の卒業アルバムを見せて貰っていたのだろう。この高校の野球部の髪型は自由のはずだ。

「さて、じゃあ俺は帰るかな。学校も半日だけなら休みになればいいのにね」

「河野君は結局、明日明後日の休みはどうするの？」

片岸が尋ねる。これにも深い意味はないんだろうなあ。

「ま、久しぶりに体を動かして汗を流すのも悪くはないかも。ひよつとしたら、駅の近くの武道館に出没するかもね」

流石に住所までは分からなかったが、浅間研明という人物が、何かを知っている可能性が高い事はわかった。藤原惟の住所は俺が昨日のうちに隣のクラスの連絡網から割り出してある。我が家から意外と近場、柴賀駅の近所らしい。家から自転車で十分程度だろうか。「ハル、ありがとな、引き続き頼むわ」

そう言い残して、俺は学校を出る。

今日はダルいし昼食もまだだ。どうせ暇な明日にでも、軽く藤原邸の様子を伺ってこよう。そして俺は自転車に跨り、いつものようにジエイダイト・スフィアの音楽を再生した。

柴賀市宮武道館は、一階が剣道場、二階が柔道場、屋外には弓道場を備えており、時期になるとそれぞれの大会も行われる、結構大きな武道館である。

『威風堂々』

ある有名な書道家の遺墨らしい、清々しく、勢いがあり、尚且つ繊細な筆遣いで書かれた看板を見上げる。

よく晴れた日曜、俺は楠や片岸に言ったように柴賀市営武道館を訪れていた。

以前、父親の勧めで武道をしていた頃は毎日のように此処へ来ていたものだ。親父が離婚してからは、何となく疎遠になってしまい、高校受験で時間が無くなったこともあって、ここに来るのも随分久しぶりな気がする。

入り口のドアに手を掛ける。錆かけた蝶番ちようばんが軋んだ。武道館の奥から竹刀で打ち合う、乾いた音が幾つも聞こえてくる。

この武道館では、毎週日曜の午前中に自由参加の練習会が行われる。練習会には高校生や中学生だけではなく、一般の人も参加が可能のため、相手を求めてやって来る熱心な輩も多い。ちなみに、俺は人に会いに来ただけで練習会には参加しない。

俺は顔見知りの事務室のおっさんと挨拶を交わす。奥では講師が何人か会議をしているようだった。単にだべっているだけかもしれないが。

時刻は十一時五十分。練習が終わるまでもう少し。俺は剣道場の隅に腰を下ろして待つことにした。

紺や白の胴着が互いに打ち合う中、一際目立つ男がいた。

身長は男にしては小柄。顔も面に覆われていてわからない。が、その存在感だけで、誰かが一瞬で判断できる。基本的な刀の柄の握り方は、右手を柄の上部に、小指と薬指のみを締め、他の指は卵を握るように添える。こうすることで、竹刀を振り下ろす際のブレがなくなり、いざという時も対処しやすい。

その男は、右手のみで竹刀を握っていた。

左腕が無い訳ではない。だが、彼の左腕は麻痺したように機能していないのだ。

構えは右腕にあまり負担がかからない上段の構え。柄の端を掴むようにして握り、片腕で互角稽古こかくに挑んでいた。普通に考えれば、彼と打ち合っている、対照的に大柄な相手の方が体格的には圧倒的に有利。しかし、双方は互いに決定打をだせないまま、膠着状態が

続いている。一瞬の油断や隙が敗北へと直結する氷の時間。

一瞬、小柄な剣士が竹刀を短く持ち替た、男とその隻腕が霞む。剣道場に心地良い音が響いた。

隻腕が放った疾風の一撃。神速の竹刀は、完全に相手の胴を捉えていた。一本だ。それが契機となったように、講師の一人がその日の練習の終わりを告げた。

掃除の邪魔になると思い、スポーツ飲料ばかりが並ぶ自販機に寄つてからロビーまで移動。長椅子に腰を下ろし、缶から少しだけ飲む。

暇を弄んでいると、俺の右隣に腰を下ろす汗臭い塊。『新宮』と名前が縫われた袴。先程の隻腕の男、俺をここに呼びつけたその人だった。

「よ、久しぶりだな圭輔」

「ご無沙汰してます」

首にかけてスポーツタオルで汗を拭うこの隻腕の男の名は、新宮^{しんぐう}満^{みつる}。以前俺がここに通り積めていた頃、兄のように世話を焼いてくれたのがこの男だ。

両親が離婚して、ここに来ることが少なくなった今でも、ちよく俺を今日のような練習会に誘ってくる。そう言うものの、本当は一人暮らしをしている俺の事を心配して、顔を見るための口実である事が、不器用さを隠しきれない新宮満の振る舞いから見え見えだった。

この男は、俺が十二の頃に交通事故で片腕の自由を失い、同時に弟を失った。その弟は俺と同じ年だったらしい。

心配してくれている事に悪い気はしないし、一人暮らしは何かと心細い。例え弟の面影を俺に重ねているのだとしても、その気遣いが嬉しかった。敢えて言うならば、性格にちよつとばかり、というかかなりの難があるのだが……。いや、俺も決して他人の事は言えません。

「それで、わざわざ休日呼びつけたってことは、またアレですか

？」

「そうなんだよ、コレコレ！」

新宮が新しい玩具を自慢する子供のように目を輝かせ、担いでいた物を下ろし、それに巻かれた布を片腕で器用に外していく。中から現れたのは緩く湾曲した白木。鞘から少しばかり覗く白銀の輝きは模擬刀ではない、紛うことなき真剣である。分かっていながら、俺は我慢できずに尋ねる。

「それ、本当に本物ですか？ マジで？」

「失礼な、コイツは日本でも有数の名刀、業物の一振りである『宗嶽泰光』だ。自分で言うのも何なんだけど、全国大会に出場した際、オレの試合を見ていた日本剣道連盟の会長が心を打たれたらしくてな。彼に無理を言っつて譲つて貰ったのだ」

「ああ、あの試合ですか。放送時間の延長のお蔭で予約録画の時間がズレて代わりに入っていました」

去年の夏に行われた、全国大会の記憶はまだ新しい。それほど印象強かった。

第六十一回全日本剣道選手権大会で、隻腕の剣士こと新宮満は大健闘した。

個人戦の三回戦目、相手に小手で先制された新宮は、試合時間の終了間際になんとか小手を決めて追いつく。時間無制限の延長は約一時間にも及び、最後は小柄な身長を生かし、相手の喉を突きで鋭く捉え、見事勝利を勝ち取った。

次の四回戦目では奮闘するものの、残念ながらその大会で準優勝した選手に敗れてしまったのだが。約一時間に及ぶ激戦、歓声で会場が割れたという、その隻腕の剣士はスポーツ紙や週刊誌にも大きく取り上げられ、1つの伝説を作り上げたのだ。

その記事を担当したが、当時新聞社に勤めており、現在はフリーライターの俺の母である。

とまあ、そんな話は置いておいて、日本剣道連盟の会長さんから譲り受けたというなら、いよいよホンモノのような気がしてきた。

「見ろよ圭輔、この滑らかで繊細な波紋を。本当に水面の波のようじゃないか。それにこの刀身の反り具合、切れ味というただ一点に特化した日本刀の、物理的な負担を無理なく逸らし、一撃で相手の髓まで断ち切る鋭さ。ああもう、なんて表現すればいいのか、オレの語彙力の無さが恨めしいっ！」

まーた始まった。

これがこの男、新宮満の最大の欠点。彼の剣道に取り組む真摯な姿勢や、日頃の行いは模範的の一言なのだが……。これがヒートアップしてくると、今のように俺に竹刀を持たせて「試し斬りさせて、頼む！一回だけ！絶対に寸止めするから！」などと言ってくる。勘弁してくれ。

「あの、新宮さん？俺もこの後予定があるんで、日本刀自慢が終わったのなら帰っていいですか？新宮さんもその格好のままじゃ風邪ひきますよ」

「む、それもそうか。……運の良い奴め」

今さりげなく何か聞こえた気がしたが、無視無視、全力で無視！

「あと、おじさんに挨拶しようと思うんですが、まだ会議中みたいですね……」

俺は強引に話題を反らす。

「ん、ああ。親父は昨日発生した辻斬り事件について緊急会議だと今までも似たような事件がいくつあつからな。警察も本腰を入れたきたな」

おじさん、新宮の父は警察官だ。階級は警部。一部の暴走族からは『柴賀の黒い疾風』と言われ、尊敬と畏怖の眼差しを向けられている、という話だ。

若い頃に随分暴れていたらしく、違法改造した漆黒の単車で当時の柴賀市を百二十キロオーバーで駆け巡っていたことに由来するらしいが、今ではただの気の良いオッサンである。最近は中性脂肪が気になっているらしい。

「今朝のニュースでもやってましたね。無職の二十九歳男が人目につかない路地裏で、腰から上下に両断されて死んでいたって事件でしょう？ 辻斬りの異名が表すように凶器は日本刀、と推測されていますけど、刀で人体を真つ二つにするなんて、本当にそんな事が可能なんですかね？」

新宮は少し思案して、答える。

「いつの時代だったか忘れたが、昔、死んだ人間を七人重ね、一太刀で両断した人が居たらしい。勿論、実際に刀を振る人間の技量や刀自身の切れ味がそれを大きく左右するんだろうが、不可能ではないだろうな」

疑問はまだ残る。死んだ人間ならば、横に寝かせて体重を掛ける事が可能だろう。だが、昨日の事件のように生きた人間を、真横からの太刀で両断する事は可能なのだろうか？

先の話が本当なら、別の手段を用いて、横に寝かせてからなら容易だろう。実は全く別の方法で殺害しておき、警察の操作を攪乱させるため、かもしれないが、それなら新宮の言うように、複数の事件で『辻斬り』が成立するのは無理がある。どちらも説得力が無い。俺が思考に耽っていると、再び新宮が刀を見て色々呟き出したので、俺は逃げるようにその場を去った。

まあ、いいや。どうせ俺には関係の無い話だし、警察が動いているなら犯人は近いうちに捕まるだろう。俺に出来る事と言ったら、無駄に犠牲者を増やさないために夜道は歩かないようにするくらいだ。犯行は全部夜中に起きているらしいし。それで終わり。

時計を見ると、既に十三時をまわっていた。昼食は早めに済ませるので、この足で藤原邸へ向かう事にした。

「浅間君、なんのつもりなのかな？」

頭上から掠れた惟ゆいの声が降ってきた。以前とは全く違う惟の冷やかな声に、俺は返すことが出来なかった。

「答えてくれないと分からないよ、浅間君」

息苦しささえ感じる威圧的な声に、体が思わず跳ねる。

静かな部屋の大気を伝わって、惟の感情がオレに流れ込んでくるようだった。

怒憎悲何故涙不信痛怖……。

ここから逃げ出したいという恐怖心と、後悔に押しつぶされそうになる。だが、惟を変えてしまったのは紛れもないオレなのだ。もっと早く、惟に会いに来るべきだった、謝りに来るべきだったのに、オレは……。床を見つめたままのオレの口から、自然と独白どくはくめいた言葉が漏れた。

「オレって奴はさ、とことん腐った野郎だな……」

無言。オレは続ける。

「惟の気持ちも考えずにさ、オレの気持ちを押し付けて、勝手に勘違いして……。オレがお前に、告白したとき、何でお前がオレを叩いたのか、考えもしないで、オレは怒りに任せて、お前に、取り返しのつかない、あんな事を……」

「……昨日、おばさんから電話が掛かってきて、惟の話を聞いてやってくれて言われなかったら、オレは今でも友達と遊びに行ったり、ゲームしたりして、お前の事を忘れようとしたと思う。お前がこんなに苦しんでいるのに、はは……本っ当に最低な野郎だよな……」

「……でも、さ」

「オレがお前の事を好きな気持ちってというのは、偽物なんかじゃないんだよ。だからさ、なんて言えばいいのか、よくわからないけど、オレ、お前にも好きになってもらえるように頑張るよ。あの日の事に対して、許してもらえないなんて思ってたけど、オレの人生をかけて償っていききたい。もう、逃げたくないんだ。このままなんて嫌なんだよ……」

惟と目が合う。目を逸らしたい強い衝動に駆られるが、俺はもう目を逸らしたりしない。

許してもらえない訳がない。だけど、だからといって何もしないのは、おかしいから、オレはオレの出来ることを、惟が望むことを、していかうと決意した。

「……惟」

オレは細い惟の身体を引き寄せ、惟の乾いた唇を、オレの唇で塞いだ。惟は意外にも無抵抗だった。

静寂の後、唇がゆっくりと離れる。

「……か　　て　　だね……」

惟の濡れた唇が何かを呟いた。

「……えっ？」

細い腕が伸ばされ、惟が自発的に口付けをしてきた。オレの口内に浸入してくる惟の舌。オレは驚愕で何も抵抗ができなかった。絡み付いてくる惟の舌はオレの歯茎や歯を丹念たんねんに舐ねぶる。蠢うごめく舌はオレの喉の奥に甘い唾液を流し込んできた

「ゆ、惟……？」

やがて離れた唇が粘着質の糸を引いた。

「いいよ、許してあげる」

意外すぎる呆気ない惟の言葉に、オレは惟を見つめる。瞳には先までの悲しみはなく、変わりに嬉々とした感情があった。それはあまりにも見慣れた、惟の優しい笑み。以前と変わらない、惟の。でも、オレはその笑みに、何故か寒気のような感覚を覚えた。

「さつき、自分の人生を懸けて償ってくれるって、浅間君、言ったよね。本当……？」

生唾を飲み込み、頷いて肯定する。オレの頭は惟が許しをくれたことでどこか夢心地だった。

惟の口唇が、どこか淫靡いんぴな動きで、言葉を紡ぐ。

「私のお腹にね、赤ちゃんがいるの。それでも……？」

砲丸で頭を吹き飛ばされたような衝撃。視界が大きく揺れる。

「なん、だって？」

「……だからあ、私のお腹に浅間君と私の赤ちゃんがいるの。浅間君はパパになったんだよ。

あ、パパなのに浅間君ってのはおかしいね、これからは研ちゃんカスって呼ぼうと」

でも、オレは決めたんだ。混乱する思考を必死に纏め、オレは頷く。

惟は満足げに笑った。初めてベッドから立ち上がり、大きく伸びをする。

「あーっ、もう悩んでたのがバカみたいだよ」

惟が元気になったのはいいが、オレはその変化についていけず、戸惑う。

「あ、そうだ。久しぶりに外に出たいな、研ちゃん、付いてきてくれるよね？」

反論を許さない惟の言葉。クローゼットから上着を取り出し、羽織る。そのまま惟は部屋を出て行ってしまった。訳も分からないオレは、ただ、そんな惟についていくしかなかった。

「ごめんなさいねえ、二回も来てもらったのに、惟、ちょっと前に

浅間君と出掛ちやったのよ」

藤原のおばさんは疲れた、しかし安堵あんども等分に配合された表情で答えた。引きこもっていた一人娘が初めて自分の意志で外出したのだ。親としては嬉しい限りだろう。

「いえ、何も言わずにいきなり訪ねて来たのは私ですから、どうかお気にならず。では、失礼します」

「あら、お茶もお出しできないでごめんなさいねえ。またいらしてね」

「はい、ありがとうございます。どうかゆつくり休んでください。それから、よかったですね」

笑顔で玄関を出、藤原家が見えなくなった所で溜めていた息を一気に吐き出す。慣れない社交辞令は疲れる。猫かぶるのも楽じゃあない。

昼間に藤原惟を訪ねて来たときは、寝ているからごめんなさい、と追い返され、二度目は外出中ときた。なんとという肩透かし。今日はずいていない。目的を失ったので、仕方なく帰ることにする。藤原家の前で待ち伏せてもいいが、帰ってきた浅間研明と鉢合わせするのは避けたい。藤原惟の友人だと、嘘を吐いて訪れたのがバレてしまう。

帰り道、柴賀駅北口が大型デパートの改装中のため通行止めになっていた。ここを通れないと随分遠回りになってしまう。むう。

まあ、徒歩だし通れない事もないだろ。日曜で工事が休みなのか、作業員も居ないし。

看板を無視し、排水管の工事のために敷かれた砂利を踏み、進む。なんとなく石を蹴る。石は弧を描いて落下。落ちた先はまだ乾いていないコンクリ。

「あ」

1、見なかったことにして立ち去る

2、そつと石を除けておく

3、素直な心で謝る

目撃者も居ないし、1。

さあて晩御飯は何にするかなつと。よし、俺は今日ここには居なかつた。ok。

突然、関係者意外立ち入り禁止と書かれた扉が開く。思わず道に止めてあつた重機じゅうきの後ろに隠れる。日曜だから休日じゃねえのかよ！ 日曜くらい休もうぜ。だが、扉から出てきたのは、どうみても作業員ではない、高校生くらいの男女。

あれは……写真で見た、藤原惟と浅間研明！？

距離があるので何を話しているのかは聞き取れないが、間違いない。何である2人がこんな所へ？ いくつも疑問が浮かび、弾けて消えていく。同時に、胸中では楠に話した予想が確信に変わって行くのがわかつた。

ここからじゃ聞こえない、もう少し近付いて……。踏み出した靴裏で、砂利がざらついた音を立てた。それに気付き、藤原惟が振り返った。一歩一歩近付いてくる足音。

ああ、どうする、フレンドリーなフリをして出ていくか？ 何食わぬ顔で「隠れん坊です、サーセンww」？ いやいや、どっちも無理があるだろ！ 出てこい、なんか気の利いた言い訳！

だが、あと数歩で見付かるといふ所で、藤原惟の足が止まる。

「惟？」

浅間研明。

「ううん、何でもなし。気のせいだと思う。それより、次は研ちゃんの家に行きたいな。久しぶりだし、おじさん元気かな？」

「構わないけど、お前、オヤジの趣味知らなかったか？ 俺んちに来てもオヤジの部屋には近付かない方がいいよ。絶対」

微かな笑い声と共に足音が遠ざかっていく。胸をなで下ろし、重機の横から顔を出す。2人が行ったことを確認。

「何やってんだ、お前」

「くあwせdrftgyふじゅこ1p!!」

いきなり背後から声を掛けられ、言葉にならない悲鳴を上げて後転、倒立、尻から着地。そこにいたのは本日二回目、新宮満しんぐう みつる。

「な、んだ、新宮さんか、驚かせないでくださいよ……」

「なんだとはなんだ。お前、この道は通行止めだろ、鬼ごっこか？」

「それを言うなら隠れん坊でしょう。で、新宮さんが何でここに？」

「ん？ オレは、ホレ」

新宮は右手に持ったスーパーの袋を掲げて見せた。中には特売品の食材。

「買い物、ですか。ご苦労なことです」

「お前、良いのか？ タイムセール終わっちまうぞ」

急いで時計を確認。げええ、忘れてた。走って帰っても間に合いそうにない。

「まあ、気を落とすな。ホラよ」

新宮は俺に見覚えのある殺虫スプレアの缶を投げてよこした。

「……何コレ」

「見りゃあ分かんذار」

「いやいやいやいや」

「そうじゃなくて、何でコレを俺に渡す？ しかもコレ、去年くらいにニユースでやってた、引火性が強いからって製造中止になったあの殺虫剤じゃねーか」

「いやね、スーパーに行ったときにさ、在庫が余ってたのか、一缶五十円の格安で売ってて。安かったから思わず買っちゃった」

「大丈夫なのかあのスーパー!？」

「で、やっぱり使うの怖いからお前にやる。さらば」

そう言うと、新宮は脱兎だつとの勢いで去っていった。速っ！

不要なことこの上ないが、捨てていくこともできないため、仕方なく持ち帰る事にする。

尻の土を払って立ち上がると、重機の部品に頭をぶつけて、痛さで転げる。

馬鹿らしくなって道路に大の字に寝転がる。見上げた空は随分暗くなっていた。律儀に握っていた缶が地味に体温を奪っていく。やれやれ、今日は厄日らしい……。

4・絡み合う意図

- からみあついと -

三連休が明けた。既に黄金週間の約半分が過ぎたことになる。課題は参考書を開いてもいない。

気だるい授業は相変わらず気だるく、もはや聞く気すらない。

あの日以来、俺は改装中のデパートで遭遇した二人のことばかり考えていた。

藤原惟と浅間研明。

あの時は気にしていなかったが、一緒にいた二人からは、逼迫した空気が微塵も感じられなかった。浅間研明が「Ka・z」であるなら説明し難い。単純に考えれば和解。もしくは、最初から俺の考え過ぎか穿ちすぎか。そうだとしても、未だに藤原惟が登校を拒否し続けていることは事実。それに、隣のクラスではその両名が欠席だった。藤原惟は相変わらず登校拒否、浅間研明は忌引きらしい。このタイミングで忌引き、何か関係が？

……考える材料が少なすぎる。

楠の調査結果、もしかしたら意外な情報が釣れるかもしれない。

授業終了の予鈴が響く。

教室を出ようとしたところを教師に呼び止められ、一枚の紙切れを手渡された。放課後……つまり今、職員室に出頭しろとの事だった。俺、何かしたっけか？ 心当たりが多すぎて分からない。

あんまり暇なわけでもないんだがなあ。

「失礼します」

職員室の空気はどこか息苦しい。何人かの教師が訝しげな視線で俺を一瞥した。今日は息苦しさが二割り増しだ。

「来たか」

学年主任の立山たちやまが野太い声で俺を招く。そこには紅茶をすする楠がいた。

「遅いぞ、圭ちゃ……じゃない河野くん」

「ハル、ここに居たのか、結構探したぞ」

俺は楠の隣に用意された椅子に腰を下ろす。俺と楠が同時に呼び出されたとなると、今まさに首を突っ込んでいる藤原惟と浅間研明に關連することだろうか。立川が冷めきった紅茶を差し出してくる。遅れてきた俺に対する当て付けか？

「河野、授業聞いとかないと、後から苦労するぞ。今年度で三年生なんだから、少し自覚をもつてだな……」

耳が痛い。まさかとは思うが、小言を言うためにわざわざ呼び出した訳じゃないよなあ。もしそうなら帰してくれ。俺がげんなりした顔をしていたのに気付いたのか、立川が思い出したように話題を変える。

「あー、正直に答えてな。お前達、二組の藤原について、なにか知ってない？」

ああ、やはりこの話か。

いい機会だ、馬鹿正直に答えるのではなく、情報を引き出してやる。

「言っている意味が分かりませんが」

楠が一瞬俺に何か言いたげな視線を送るが、俺の意を察したのだろう、そのまま何も言わなかった。眉間みけんに皺しわを寄せ、しばし黙った立川が口を開く。

「あー、お前達、今月の初旬から藤原が学校に来てないのは知ってる、よな？ その藤原の保護者から今朝連絡があつてな、困ったことに一昨日の日曜から、行方が分からないらしい」

俺はハツと息を呑む、演技^{フリ}をする。

日曜と言えば俺が藤原邸を訪ねた日、改装中のデパートで藤原惟を見かけた日だ。あの日は浅間研明と行動を共にしていた筈だが、彼ではなく俺と楠に尋ねてきたことを考えると、2人とも行方不明に……？

「え、それって、家出つてことですか？ どうしてですか？」

楠が声に驚きを滲ませて聞き返し、俺があまり驚いていないことに二重に驚いているようだった。

「家出、になるんだろっけど、理由は分からん。だから、お前達が何か知ってるかと思つて聞いてみたんだけど。あー、最近、お前達が藤原を心配している、って聞いたからな。なんでもいい、なにか心当たりはないか？」

脳裏をあゝの改装中のデパートが掠める。でも、あそこだって平日になれば作業員が出勤してくるはず。立て籠もるなんて出来る訳が無い。

「……いいえ、これといつて特には。この件、警察には？」

「あー、まだ、なんだ」

俺は無言で理由を要求する。

「あんまり大きな声では言えないんだけどな。あー、藤原と同じクラスの浅間、今日は忌引きで学校に来てないだろう。実は、日曜日にお父さんが亡くなられてな。亡くなられるすぐ前に、藤原が浅間の家に行つていたらしいんだ」

立川はさらに声を落とす、続ける。

「あー、浅間のお母さんも、藤原の両親も事を荒立てたくないと言つていてな。いや、先生は藤原を疑つてなんかいないぞ？ でもな、タイミングがタイミングでな……」

「あの、立川先生、それ以上はちよつと……」

話が過ぎる立川に、藤原・浅間の担任である杉谷^{すぎたに}が釘を刺した。化粧の薄い顔にははつきりと疲れが見える。

「ほら、あなた達も、呼び出して悪かつたね。でも、あんまり根掘

り葉掘り聞かないの。なんにも心当たりがないなら、残って勉強するか、早く帰りなさい」

俺は口を付けていない紅茶の杯を立川に返し、楠と一緒に職員室を出た。

ネクタイを緩める。空気が美味しい。さて、これからどうしたもののか。

「お前、これからどうするんだ？」

「何が？」

俺の内心を見透かしたような問い。

だが違和感に気付き、俺は歩を止める。振り返ると、顔に憂慮ゆうりょを貼り付けた楠が上目遣いで俺を見ていた。

「屋上、行こっか……？」

KBR

KBR

「お前はなにか知ってるんだろう？ 日曜日に藤原さんの家に行くって、言ってたもんね」

数日前とは逆に、楠が屋上のフェンスに指をかけ、柴賀市を見下ろしながら俺に尋ねる。

「さつき先生に言わなかったのは、どうして？」

言いたくなかったから、そう答えようとして、続く楠の言葉に遮られる。

「藤原さんと割と仲が良かった友達に聞いてみたんだよ、なにか知らないか、つてさ。そしたらその子、急に泣き始めちゃってさ。いんなことを教えてくれたんだ。お前の予想、的中してたらしいよ。オメデト」

俺は答えない。

「お前は、これからどうしたいんだ？」

俺は答えない。

「実は、今日職員室にお前が来る、少し前に杉谷先生に頼まれ事されちゃってさ」

俺は答えない。

「浅間君、ここ一ヶ月で何度もスクールカウンセラーの先生に相談しに行つてたんだつて。学校に来てても、授業はあんまり出てなかつたらしいし、凄く辛そうだったんだつてさ」

俺は答えない。

「それで、杉谷先生、何回も浅間君に大丈夫かつて聞いてたんだけど、これは自分の問題だからつて、なにも教えてくれなかつたんだつて。浅間君、野球部でも仲のいい友達には相談してたらしいからそれはそれでいいかな、つて思つてたらしいんだけど。今日、連休明けにこんなことになつちゃつてさ、先生、何度も浅間君と藤原さんの家に電話を掛けたんだけど、藤原さんも浅間君も、日曜日から家に帰つてなかつたらしくて……」

仲のいい友人、か。恐らくは一組の小田か、二組の上島あたりだろう。そのくらいの友人関係は俺も調べてある。その二人のうち、小田の方は浅間と中学の頃から友人のはずだ。独自に貸してもらつた浅間と藤原の卒業アルバムに、浅間と笑顔で肩を組んで写つていたのを確認している。小田なら、藤原とも面識があるはずなので、何か知つている可能性が高い。そう踏んで何度か一組に出向いたものの、昔から身体が弱いらしく結局合えず終いだつた。

「先生じゃ藤原さんと浅間君がどこへ行つてしまつたかもわからない。どんな小さなことでもいい、気付いたら教えてね」つて」

そういえば、杉谷は楠と樋口の部活の顧問だつたはずだ。元気の無い先生を見て、楠なりに心配しているんだろう。

「それで、もし、お前がなにか知つてたら、私には教えて欲しいと思つたから。お前が、学校の先生達をあんまり好きじゃないこと、知つてるし……」

日曜日に浅間の父親が死んだ。同じ日に、約一ヶ月登校を拒否していた藤原が浅間宅を訪れている。改装中のデパートで遭遇した二人の会話から、これらは確実。その直後に起きた両名の失踪、出来過ぎていのように感じるが、この二つに何らかの関係性がある可能

性は高い。

「日曜、夕方に藤原を訪ねた時には、既に藤原惟は居なかった」

楠の反応に構わず続ける。

「そのすぐ後だ。浅間研明・藤原惟と一緒に行動しているのを見かけた」

「！ど、どこで!？」

案の定、楠は食いついてきた。俺は焦らすようにゆっくりと話す。「まあ慌てなさんな、深呼吸しろ深呼吸。恐らく、多分だが、浅間と藤原の両名は今もそこにいる、と思う」

「だから、それはどこ!？」

楠が俺の胸倉を掴んで、前後に激しく揺さぶる。同時に頸動脈が締まって苦しくなってきた。いかん、このままでは十秒とかからずに落とされる！

「ぐふ、わか、った。言うから、手え、手を放し、なさい！」

貪るような深呼吸。ああ、空気が美味しい。

「その前に、本当にそこに居るかどうか、情報が足りていない。まずは情報、それから確かめに行く」 K B R

K B R

「圭輔え、お前も隅に置けないねえ」

「そんなんじゃねえですと、もうかれこれ六回目です」

柴賀市営武道館の向かいにある、木造の小さな喫茶店。テーブルや椅子も櫛で統一されており、暖かみのある凜とした統一感と、香ばしい珈琲コヒキの香りが店内に安らぎをもたらす。

杯の珈琲に映る俺の表情は、いつも通り不機嫌に見える。

俺と楠の向かい側に座った新宮満は、ここに来てからずっとにやけている。キリがないので、俺は隣の楠を肘でつつく。

「ホラ、自己紹介」

「あ、私、柴賀東高校三年の楠遥香です。今日は忙しいところ、ありがとっございます」

楠の言うように、新宮には無理を言っただけ練習を抜け出してきてもらった。そのため、喫茶店に剣道着という、なんとも不似合いな格好で新宮はそこにいる。

「さつさと本題に入りますよ。先日、日曜です。俺らの同級生の父親が死亡したそうです。事件が事故かは知りませんが、新宮さんはご存知ですか？」

「お前たちの同級生の父親かどうかは知らないが、確かに、そういう事件があったな。日曜、最後にお前に会ったすぐ後に、親父達が慌てて飛び出して行ったよ。非番だったのに、警察も大変だ」

「事件だったんですか、殺人とか？」

新宮が右手で珈琲を混ぜながら答える。

「お前、ニユース見てないのか？」

そういえば、日曜から藤原と浅間のことばかり考えていて、新聞やニユースを聞き流していた。

「酷いモンだったらしいぜ、現場に到着した新米警官や野次馬が、遺体を見て何人かゲボゲボ吐いたそうだ。犯人は今も逃走中だったよ」

俺の脳内で、新宮の言葉と日曜の記憶が連結される。

「ちよ、ソレってマズいんじゃないすか、結構この近くでしょう？」

それに、その犯人っていうのはまさか」

「今親父達警察が血眼になって捜してるよ。オレも親父からチラッと聞いただけだしな、詳しいことは分からないが、多分そのとおりだろうな」

そう言われて俺は押し黙る。楠は話について来れず、頭上に疑問符を浮かべていた。

「ニユースや新聞でもしつかり報道されていたはず。一番最初の事件は確か、六年くらい前からかな。最初の被害者は……土木会社の社長だったかな」

「辻斬りの被害って、そんなに前から存在してたんですか？俺、最近まで知りませんでしたよ？ ホントに今回のと同一犯なんです

か、ソレ」

「お前が知らなかったただけだ。その時の犯人は逮捕されて現在も服役中だ。あの時と同じケースで、今回の事件は起こっているところが問題らしい」

なるほど。その犯人と同一犯であるという可能性は無いのか。今回の事件の犯人が、服役中の人物と何らかの接点を持っているのか、あるいはその模倣犯なのか。それが問題で警察が動き始めたのか。ん、待てよ？ 最近になって俺が聞いたって事は、断続的に続いている反抗ではなく、六、四年前から最近まで活動していなかったのか？

「ハルは覚えてるのか？」

「ああ、そんなニュースもあつたなーって程度には。でも殺された人がどこかの社長さんだったとかは覚えてないなあ。確か私達が中二の時だったと思うから、四年前じゃない？ 私も最近のニュースを聞いて思い出したんだけど」

「あら、どこで間違えたかな。そう、四年前だ四年前」

新宮が自嘲気味の表情を浮かべた。そうか、六年前って言えば新宮さんの弟が……。

「新宮さん、ありがとうございました。まだ分からない事がありますが、おかげでいくつか疑問が解決しました。これはほんのお礼です」

俺は伝票を持って立ち上がる。楠も残っていた紅茶を一気に飲み干し、新宮に一礼した。

「まあ、何だ。オレが言っても格好付かないから言わないけどな」
新宮の目は、まるで手の掛かる弟を見ているようだった。悪い気はしない。その眼は、静かに「無茶はするなよ」とだけ語っていた。会計を済ませて外に出る。まだ時間はある。

問題はいくつか解決したと言ってしまったものの、情報を整理する時間が欲しい。

「ハル、悪いが少し時間が欲しい。用件は明日にしよう。じゃあな」

「え、ちよつ、おい！」

楠が呼び止めるのも無視して、俺は早足で歩き出す。

最近の辻斬り事件と、藤原・浅間の失踪。とてもじゃないが時期的にも無関係だとは思えない。

クソツ、一体どうなつてやがる！

今朝から楠が俺と目を合わせてくれない。当然といえば当然だが、弁当をつつきながら、片岸は心配そうに俺と楠を交互に見る。

「河野くん、ハルちゃんとなにかあったの？」

答えは簡単。昨日、浅間研明と藤原惟を見かけた場所を教えると言っておきながら、一方的な理由で約束を破つたのは俺だ。

「大した事じゃないよ。だから、片岸さんは心配しなくても大丈夫」俺は適当に誤魔化する。

予鈴とは違う、校内放送が響く。職員会議にしても時間がまだ早い。教室に満ちていた話し声が若干静まる。スピーカーから聞こえてきたのは教頭の声。

『えー、突然ですが、本日の午後の授業は都合により放課になりました。繰り返します。本日の午後の授業は都合により放課になりました。詳しくは担任の先生から説明がありますので』

それだけ言つて、校内放送は途切れた。教室に生徒の歓喜の声と、疑問の声が半々に満ちる。

「ハルちゃん、今の放送、本当かな？ ハルちゃん？」

片岸が訪ねるが、楠は答えない。

漸く口を開いた楠は、片岸ではなく俺に話題を振つてきた。

「圭ちゃん、これって、もしかして……」

「まあ、十中八九間違いないだろうね」

楠はそのまま沈黙。三人の間に再び気まずい空気が流れる。俺は味のない弁当を掻き込み、ペットボトルのお茶と呑み込む。

確信は無い。

だが時間ももう少ない。

教師が来て、明日も学校が休みになった事を告げた。理由はやはり、浅間研明の父親が殺害されたことを受けてのものだった。

俺は楠だけに聞こえる声で、そつと囁く。

「今日だ。十八時に、駅で待つ。疑念や迷いがあるなら来るな。俺は一人でも行く」

学校が放課になったのは好都合だ。時間まで、確かめなければならぬことがある。

楠達と別れた後、俺は探していた人物に会うことができた。むこうも俺を探していたとは少々驚いたが。

「三年一組、小田仁（おだ ひとし。）所属は野球部。探す手間が省けたというかなんというか、用件は、まあ分かりきったことか」
スポーツマンとしてはやや小柄な小田の身体が、俺の言葉で跳ねる。目の下にははつきりと隈くまが見え、随分と衰弱くましているようだ。身体が弱いというのは嘘ではないらしい。もっとも、原因はそれだけではないのだろうが。

「えと、初対面の人にこんなこと言うのはおかしいかもしれないけど、笑わずに聞いてくれる、かな？」

俺は頷いて肯定する。しかし線の細い野郎だ。

「あ、ありがとう。実は、浅間君の事なんだけど……」

小田の話は、彼が浅間に相談された内容が主だった。その多くは俺の立てた仮説を補完するようなもので、状況が大きく進展するよきな決定的なものでは無かった。ただ、小田の口から興味深い話を聞くことができた。それは中学時代からの小田から見た浅間と藤原の関係。

小田の視点は鋭かった。論理的で説得力もあり、信用するに値する内容だった。小田の話と俺の知っている情報を組み合わせると、俺としても意外な、浅間と藤原の関係が浮かび上がってきた。にわかには信じがたいが、どうやらあの二人には他人からでは見えづらい側面があるらしい。もしかすると、本人すら気付いていないのかもしれない。

「どうしてそれを俺に？」

小田は愛嬌のある笑みを浮かべながら「黙っていてとは言われたけど、浅間君が苦しんでいるのに、彼のことを知っている僕が黙っているのは、ちょっと辛かったから……。それに、僕は楠さんに頼まれただけだよ」と言った。

楠が、ねえ……。アイツも憎いことをしてくれ。もしかして、小田は俺と楠が冷戦状態なのも知っているのか？ だとしたら、なんと空気の読める男なのだ、コイツは。

小田に対する認識を改めると共に、一応楠に感謝しておいたほうがいいんだろうな。

5・誤謬と破瓜の褌

「じゅぶつとはかのしとね」

春のまだ冷たい夜風が肌に滲^しみる。冬物の外套^{コート}を着てきて正解だった。

駅に訪れる人は先日と比べて圧倒的に少ない。これも辻斬りの影響だろうか。ケータイで聞いている地方ラジオでも、そのニュースばかりが取り上げられていた。辺りを見回し楠の姿を探すが、見当たらない。時刻は十七時五十七分。約束の時間まであと三分。

楠が来るかどうかは知らない。楠が来ても来なくても、俺は自分の行う行動を変えるつもりはない。

ふと、自分は一体何をしたいのだろうか、他愛の無い疑問が浮かぶ。瞑目して考えてみたが、答えは見つからなかった。強いて言うなら、愉しそうだから。その一言に尽きる。

デパートで浅間研明と藤原惟を見つけた後の事も、正直言えば考えていない。家に帰るよう説得するだけというのも、単純過ぎてつまらない。

何をすべきなのかは、とづくにわかっていた。だが、俺はそれを握り潰し、敢えて楽しみへの期待を優先した。

明日や明後日ではなく今日を選んだのも、とりわけ理由は無い。時間が経てば警察など、俺以外の人間も、あのデパートに目を付けるだろう。そうなってしまうえば、もはや俺の出る幕はない。学校が今日の午後から放課になったのも、都合がよかった。ただ、そういう意味では俺は焦っているのかもしれない。

十八時だ。楠の姿は無い。不意に、俺は軽く息を吐いていた。溜

め息？ 俺は何を期待していたのやら。重症だ。馬鹿な思考を振り払い、駅の北口に向かう。その途中で、物陰から俺を見ている人影を見つけた。

ハイネツクのセーターにジーンズ。女っ気のあまり無いその格好は間違いない。楠だった。

見つかった事に気付いた楠は、申し訳なさ気に俯むつきながら駆け寄ってきた。お前は小動物か。

「なにやってる、来ないなら置いていく。付いて来るなら、足手まといにはなるなよ」

俺はそう言い放つ。楠は少し迷ってから、小さく頷いた。

「ねえ、圭ちゃん、今日はゴメ……」って一回言ってみたかったんだよなあ、この台詞セリフ！ ってアレ？ なんか言ったか、お前」

不意ふいを突かれた楠の目が真円になっていた。そして、楠の表情に呆れと怒りの波が押し寄せてくる。

「な、ヒトがせっかく謝ろうとしてるのに、なんだお前は！ 少しは空気を読め空気を！ 死ぬっ！ 十回死ぬ！」

「あん？ 俺はこの重い空気を払おうと言っただけじゃねえか、そっちこそ空気を読め空気を」

火花が散るほどに睨み合う俺と楠。楠の悪態あくたいに感化されて、いつもの調子が戻ってきたようだ。

「……やめやめ。今はそんな話しはナシ」
冷たい風が俺と楠の間を吹き抜ける。

「あのさ、圭ちゃん、一つだけ聞かせて。これから行くところに2人がいたとして、その後どうするつもり？」

楠にそう問われた俺は、もう一度俺自身に問うてみる。出てきた結論はあまりにも簡潔だった。

「浅間・藤原を確認したら、そうだな……下らない探偵ごっこもおしまいにする。頃合いを見て警察にでも連絡するさ」

そうだ。一体俺は何にムキになっていたのやら。たかが家出少女、家出少年だ。所詮は高校生。腹が減るか、所持金がなくなれば家に

帰るしかない。この事件は放っておいても、勝手に消滅する。

「あのさ、その役割、私に任せてくれない？」

俺と楠は歩きながら会話を続ける。

「ん、じゃあ任せた……って、どうした」

「……いや、なんか、あれほどまで自分が解決すること拘こたわってたのに、あっさり折れたなあ、と」

「ああ、単純に、この遊びにも飽きてきただけさ。サッサと片付けて、風呂入って寝て起きる」

隣で楠が笑っていた。

「そういえば、一組の小田に根回ししてくれたんだな、ありがとうよ」

「どういたしまして」

「さあて、それじゃ、面倒な問題児をとっちめに行くとしますか」

「それって、私達と事じゃなくて？」

馬鹿を言っつて笑い合える。そうだったものも、もうしばらくは悪くないのかもしれない。

柴賀駅北口、改装中のデパート。以前はこの辺りで唯一の大型ショッピングモールだったらしい。最近では建物の老朽化が進み、耐震性にも問題が見られるようになったため、その補強工事も兼ねているのだという。付近の道路は通行止めになっており、人通りは無い。

「……おかしい」

「何が？」

楠との問答で予定していた時間より少し遅れたものの、この時間は作業員の労働が終了する時間帯なのだ。その隙を縫ぬってデパートに侵入するつもりだったのだが、以前と同じように、全く人気が無い。先日、俺が頭をぶつけた重機の位置も、変わっていないように見える。

「これ、誰かのイタズラかな？」

楠の指差す先には、日曜に俺が誤って落としてしまった石が、コンクリに埋もれたままの状態でそこにあった。不審に思い、浅間・藤原が現れた関係者以外立ち入り禁止の扉、そのノブに手を掛け、捻る。施錠されていない？

扉の向こうは照明が落とされており、完全な黒だった。

ケータイを取り出しライトを点灯させると、そこは非常階段だった。埃っぽい。割れたタイルや床板がそこらに散乱していた。頭上には小さな光。四階部分だろうか、なにやら防火扉から明かりが漏れているのが見えた。俺は上を指差し、足元に注意しながら階段を登る。

「圭ちゃん、何か聞こえない？」

後ろの楠に言われ、俺は瞑目する。風の音。俺と楠の衣擦れの音きぬす。そして、歌……？

風の音に掻き消されながらも、確かな旋律が聞こえていた。俺は楠に向かって頷く。

二階、三階、と階を重ねるにつれ、音が近くなってきた。藤原か浅間かは知らないが、誰かが四階部に居ることは明らかだった。工事用の防塵シートの隙間から、夜の柴賀市が見えた。

「誰だ!？」

突然の階下からの声に身体と心臓が跳ねる。非常階段に光が満ち、一時的に視界が白で染まる。

「浅間、研明」

細めた目が駆け上がってくる浅間研明を捉える。一方で、名前を呼ばれた浅間が戸惑う。

「誰だ、どうやってここに入った？」

まずい。何故だか知らないが、浅間は随分と混乱している。ここは俺より楠が適任だと思い、目で促す。

「えーと、柴賀東高校三年の楠と河野です。浅間、研明くんですね？ あなたと藤原さんを探しに来ました」

非常階段の踊場で対面する浅間研明。身長は俺よりやや高い、1

70後半。顔付き、髪型と共にあの日に見た浅間研明だった。

「お袋に言われたのか？ 余計なお世話だ。惟はここに居ない。帰れ」

対面しているはずが、心ココに在らずと言った感じだ。非常に分かりづらいが、浅間の視線はずっと上に向けられている。

「さつきから上なにやら聞こえてきますね、藤原惟でないとすれば、アレは誰でしょうか？」

俺がおどけた態度で浅間に話しかけると、俺を殺さんばかりに睨まれた。おお、怖。

「……っ」

浅間が固まる。そして、軽い舌打ちの後言った。

「惟が会いたいつて言ってる、来い」

お、観念したか？ 浅間研明はそのまま俺達を追い越し、俺が付いてくるのが当たり前だと言わんばかりの背中で階段を登っていく。

「来て下さい、だろうが。ハル、行くぞ」

浅間が四階の防火扉を開く。

一瞬、俺は自分の目を疑った。

「なん、だ、こりゃ」

防火扉の向こうには改装の為か、壁という壁が取り払われた、ワンフロア丸々の空間があった。そこには生活に必要な家具が、一通り配置されていた。天井にはちゃんとした蛍光灯の明かり。床は白の絨毯で被われ、これでは、まるで……。

「ようこそ、私達のマイホームへ」

「藤原惟……」

呆気にとられている俺と楠を構いもせず、悠然と現れた藤原が幼さの残る口調で言う。俺は湧き上がる疑問と違和感を抑えつけ、藤原に告げる。

「藤原惟、浅間研明、お前たちを探しに来た。家の人や先生が心配している。今すぐ家に帰れ」

藤原の顔には理解不能といった表情。

「どうして？ 私達の居場所は、あんな所じゃないよ。だってここは新しく建てた私と研ちゃんの家だもの」

なんだコイツは。一見、普通に見える会話が、全く意味を成していない。

「新築祝いに来たはいいが、手ブラでね。正直俺も疲れてきたんだよ。微睡まどろみつこしいやり取りはナシだ。求める答えはYes or No。言い訳や他の答えは聞きたくない」

「Noと言った場合は？」

浅間が防火扉をロックしながら俺に訪ねる。

「浅間研明、お前には聞いていないが、まあいい。その時は多少の怪我は我慢して貰おうか。」

優しい俺が教えてやると、こっちの楠はともかく、俺はお前らが家に帰るか帰らないかは、正直どうでもいい。俺としてはさっさと帰って寝たいから、警察に通報して、保護は任せるのもいい」

俺はケータイを操作し、アドレス帳から新宮の父親のケータイ番号を探す。

「……や」

「あ？」

「いや……」

すすり泣きが静謐を一層に引き立てる。

藤原が泣いていた。様子に気付いた浅間が駆け寄る。

「みんなみんな、どうして、私の場所を奪っていくの……？ 私はただ、研ちゃんや、ことはと一緒に居たいだけなのに。浅間君も、カウンセラーの先生も、お父さんもお母さんも、あなた達も、どうしてッ！？」

俺はケータイの発信ボタンを押す。何も知らない俺だが、藤原惟の姿が日常の退屈から必死逃げようとしている自分とどこか重なり、見ていられなくなったのだ。向き質な呼び出し音が一回、二回。

「……許さない……」

それが、生まれ落ちた。

「うあああッ！」

全体重を乗せた当て身で防火扉をぶち破る。だが慣性を殺しきれず、俺はそのまま階段を転がり落ちていく。すぐ後を楠が追いかけてきた。

「逃、げるぞ！」

俺と楠は全速力で階段を駆け降りていく。頭はとつさに庇ったので怪我はないが、背中をしこたま打ち付けてしまった。だが、構っている暇はない。

目の前に落下してくる塊。黒一色の眼で俺と楠を交互に見たそれは、浅間研明の面影が残る顔で、嘲わらった。ただし、頭髪は完全に抜け落ち、眉間からは節状になった触角が一对生えていた。人面蟻とでも言うべき姿になった浅間研明が、そこにいた。そして俺を喰い殺すべく、大顎と一对増えた脚を絡めてくる。

「にに、逃がさはない」

俺は着ていたコートのポケットを探り、何かを掴み取って噴射。ライターで着火、広がる紅の火炎。一瞬怯んだ後、それでも噛み付こうとする浅間の変形した口内にスプレー缶を押し込み、後ろに跳んで離脱。直後に爆発。白煙と冷気が辺りに広がる。

「何何何今の！？」

「いいから来い！」

俺と楠は煙を眼眩まくらましにして全力で駆け出す。

「……なに、あの怪物……？」

俺は灯りのない化粧室の床に尻を落として、喘ぐように呼吸する。不安を隠しきれない声で楠が訪ねてきた。俺だって知るかよ。

「圭ちゃんはさ、どうしてそんなに落ち着いていられるの？」

「……俺は、恐怖だとか焦燥に押し潰されて、納得のいかない選択をしたくない。たとえ、後で己の行為を悔やむ時が来るとしても、他

人の選択に全てを押し付けるような無責任な真似はしたくない。それだけだよ」

俺が楠に言ったことは半分本音だ。でも半分だけなのでいまいち説得力が無い。退屈に覆われ、毎日が同じように過ぎていく日常。街には同じような家に、同じような人々が住んでいる。

藤原と浅間が変貌していく様を見て、俺は救いようのない充足を感じていた。面白い、と。それこそが俺が渴望していた、退屈という怪物から救ってくれるものなのだから。今この状況でも、喜悅が笑みを作るのを辛うじて防いでいるのだが、はたしていつまで保つか……。

「あの、さっきの爆発は何？」

呼吸も落ち着いてきたし、平常心を取り戻すためにも会話を続ける。

「……何年か前に、引火性が高くて製造中止になった、冷凍式の殺虫スプレーだよ。最近は物騒だからな、催涙スプレー代わりくらいにはなるかと思って、新宮さんに貰ったのを持っていたんだが、思わぬところで役に立ったな」

軽く咳き込む。何か武器になるものは無いかと、ケータイのライトを点灯させる。室内の壁紙は捲れ、タイルは剥がれ落ちていた。

「ハル、後ろのそれは何だ？」

俺の指差したものを拾った楠が、差し出してくる。

「バール、か」

かなり大型の鉄槌かねてし子。本来ならば、所持するだけで法に問われるこの道具がここに無造作に落ちていた所を見ると、やはりこの作業員は、あの2人に……。

「壁紙の貼り替え作業中だったのかね。他に、何か無いか？」

楠が首を横に振る。偶然飛び込んだこの部屋に、鉄槌子があっただけでも拾い物だろう。これならば十分に武器になりうる。

「そろそろ行くか」

「ちよ、ちよい待ち。今出ていって大丈夫なの？ あの二人の他に

もあんなのが居るかもしれないんじゃない？」

「あんなのがまだ何匹も居るなら、俺らはとっくに奴らの餌だ」

「で、でも……」

楠はまだ悩んでいる。

「俺だつて、奴らを殺したくないさ。でもな、あの非常階段の構造を考えれば、天井も移動できる奴らの恰好の餌食だ。他の出口を探している余裕もない。まず、放つておいても俺たちを探しに来る浅間を撃破。その後、速やかに藤原を此方から出向いて撃破。最後に脱出」

「待つて、2人を、殺す、の？」

面倒になつて、俺は頭を掻き乱す。

「じゃあ何だ、お前は大人しく奴らに喰われるのがお望みか？」

「そういう訳じゃないけどさ……」

「お前はアレが人間に見えたか？ 俺には見えなかつた。奴らが俺たちに危害を加えてくる以上、反撃するしかあるまいて。とりあえずは俺たちの身の安全の確保が最優先だ」

自衛のため、藤原と浅間を殺す。尤もらしい事を言つてみたが、それ以外の選択肢を握り潰すような俺の態度に楠はまだ納得しかねている様子だつた。どちらにせよ、一旦は説得してみるべき、か。いきなり襲いかかられでもしたら話は別だが。

俺は鉄槌子を取つて立ち上がる。ドアを少しだけ開け、外の様子を確認。手で楠に合図を出し、化粧室を出る。聴覚を研ぎ澄まし、非常階段を目指して壁伝いに歩く。

こちらの存在が既に知られている以上、さっきのように灯りをつける訳にもいかない。

遠くで小石が落ちる音が聞こえた。俺は衣料品店だった区画の角から顔を出す。が、何も居ない。胸を撫で下ろし、楠に合図を送るうと振り向く。

「圭ちゃん！」

楠の悲鳴。状況を確認する暇もなく、俺は剛力で弾かれる。顔を

上げると、俺の頭があつた場所からあと数センチというところに、浅間研明の大顎があつた。先の爆発でだろう、触角は千切れ、頬骨までもが覗いていた。

「いひ、はい痛いがつたぞ」

頭部を狙つた鉄挺子の横薙ぎの一撃を放つが、大きく半身を反らした浅間に回避される。

「ハル、お前は下がつてろ！」

切り返して放つた鉄挺子が堅い甲殻に阻まれ、衝撃で手が痺れる。「よう、久しぶり、元気そうで何よりだな。爆発のお味はいかがでしたか？」

「どど、こを見たら、元気に、見える？ あい痛い、つ、次は逃がさない」

振り降ろされた浅間の右腕を、腕を畳んで鉄挺子で防御。鋭い爪が皮膚を薄く裂き、重い衝撃が俺の身体を跳ね飛ばす。受け身をとつて着地し、片足を突き立てて全力で減速。そして加速。

がら空きになつた蛇腹の腹部を狙い、鉄挺子を突き出すが、思い手ごたえで矛先の進行が止まる。蛇腹の甲殻の繋目に先端が潜り、確かに浅間に傷を負わせていた。しかし、無理な体制からでは決定打は得られず、しかも締まつた筋肉に固定され鉄挺子が動かない。

即座に鉄挺子に手離し、肢を広げて俺に覆い被さるうとする浅間の左手首を掴んで回避、すると同時に浅間の進行方向に引き倒す。勢いを殺さず、右脇で浅間の肩を挟んで固定。両手で肘の関節を握り、巻き込むように倒れ込む。柔道の脇固めの要領で、挺子の支点となつた浅間の肩に負荷が収束され、関節の稼働限界を超えて上腕骨とそれに繋がる関節窩、伸びきつた靭帯、さらに完全に極まつていた肘関節を破壊する！

乾いた音と触感で、浅間の肩が破壊された事がわかつた。これで左腕は使いものにならない。脇腹に新しく生えた腕が俺を掴みにかかるが、一瞬早く離脱。憤怒の形相でこちらを睨む浅間が視界の端を掠めていく。俺は急いで楠に駆け寄る。倒れる一歩手前の俺を楠

が支えた。

浅間は形勢不利と判断したのか、俺と楠を睨みつけたまま後退。左腕を押さえながら暗闇への姿を消した。

浅間が再び襲ってこない事を確認したとき、糸が切れたように脚から力が抜け、床に両膝をつく。ごく短い戦闘で、俺の息は完全にあがっていた。腕を立てて耐えるものの、極度の緊張と恐怖で視界が明滅する。俺は楠の手を借りて漸く立ち上がった。

浅間が逃げ去るとき、気付いた事があった。今までの浅間の行動を思い返してみると、四階から逃げ出そうとしたとき、階段へ向かおうとしたときと、浅間は俺たちを妨害してきた。

浅間が階段とは違う方向へ逃げていったことと、会話が成り立っていたことから、奴にはいくらかの理性が残っていると予想できる。あんな蟻みみたいな格好だけだ。

奴は藤原の「帰さない」という意志を忠実に実行するとともに、俺たちを藤原に接触させないようにしているのだ。

ひよっとしたら、奴はスプレー缶の爆発を喰らってから動けなかったのではなく、動かなかったのではないだろうか。そして反撃の機会を伺いながら、俺と楠の会話を聞いていたのではないだろうか。藤原と浅間が変態してから、俺たちを追ってきたのは浅間で、藤原は動いていなかった。つまり、あの部屋には俺たちが居ると都合の悪い『何か』がある。

それが何なのかは分からない。藤原本人か、あるいは全くの別のものか……。

そうであるなら、今が好機。

浅間が『河野と楠は自分を追ってくるものとして行動している』と考え、行動していると仮定するなら、奴は階下で俺たちを待ち伏せているだろう。本来、どちらを先に処理しても大差はない。待ち伏せている浅間より、無防備な藤原を狙った方が、効率的でリスクも少ない。

楠に説明している時間はない。早くしなければ、最悪、浅間と藤

原の両方を同時に相手にする羽目になる。

ケータイの時計で時間を確認。時刻は二十時を回ろうとしていた。いつの間にか電波は圏外になっていた。

藤原が『私たちの家』と言っていた四階に辿り着く間、浅間からの襲撃は無かった。

開いたままになっていた防火扉の向こうから、笛の音のような音が連なつて聞こえてくる。

室内を覗き込むと、蜘蛛の肢を生やした藤原の頭部が、絨毯と同じ色の白い球体の上で唄っていた。瞶目し唄う藤原からは不思議と異形のおぞましさは全く感じられず、むしろ子を愛しむ母親の子守歌のようだった。俺は不覚ながらその唄に聞き惚れてしまっていた。そのため、楠が踏み出したことに気付くのが一瞬遅れた。

「藤原さん……」

唄はまだ続いている。もう姿を隠していることに意味がなくなつたので、俺は楠を追い越して室内に入る。藤原が虫の肢で細い糸を玩んでいた。端は白い球体に繋がっており、球体自体が糸の塊であるとわかった。

唄が止む。

「これはことはの揺り籠。誰にも触らせない、この子の揺り籠」

声帯や舌と切り離された筈の頭部から、滑らかに話す。

「すごいね……、研ちゃんに怪我させたんだ……」

「俺が野球馬鹿に殺られるとでも思ったのかよ金魚鉢。褒めてくれたついでにここから出してくれると嬉しいんだけどな」

藤原が身体を揺らして笑う。

「ふふふ……面白いひと。本当は殺すつもりだったんだけど、勿体無くなつちゃった。ねえ、あなた、私たちの家の警備員さんをやらない？」

藤原が繭から飛び降り、俺に近付いてくる。

「労災はおりるんだろうな、時給はいくらだ？」

俺の反応一つ一つに藤原が笑う。笑みで背筋に悪寒が走る。

「お金なんて関係ないよ、だって住み込みで働くんだから。もしOKしてくれるなら、後ろのその子を逃がしてあげてもいいよ。もちろん、このことを誰にも言わないって、条件つきだけどね」

俺に近寄ろうとする楠を手で制す。駄目か、俺も藤原も、互いの意志を曲げる気が無いのならば、正面からぶつかるとしかない。

「お断りだね、寄生虫風情が取引ごっこか？ 笑わせるな。俺はお前らに仕える気なんて無いし、俺もハルもお前らを潰してここから出る」

「……その『お前ら』には、あの子も入るのかな？」

そう言っつて、藤原は甲殻類の手で繭を指差す。

「ハ、当たり前前だろうが。あんな気色悪いモン俺が焼却処分してやるつての。中身なんて知るか」

藤原が眼を見開く。次いで背後で楠の悲鳴。振り向くと、楠が片腕を失った浅間に組み伏せられていた。下に行ったたんじゃなかったのか！？

悲鳴に気を取られた俺の足元を、瞬時に移動した藤原が脚を這い上がり、その長い尾を巻き付け俺を拘束。尾の先端にある鋭利な針が俺の首筋に添えられる。

「ことはを殺させる訳にはいかないの。……残念ね。あなたも、浅間くんみたいになっちゃうといいよ」

首筋に鋭い痛み。尾の先端が俺の皮膚に深々と沈み込み、頸椎に到達。激痛が神経を陵辱していき、思考も疑問も違和感も赤く塗りつぶされていく。

「圭ちゃん！？」

ずるりと針が抜かれ、藤原の拘束が解かれるが、痛みに立っていられず、首を押さえて床に倒れる。情けない悲鳴をあげることでもできず、痛み一色になった頭で、必死に言葉をかき集める。

「あ、があ、ぐ、何を……ッ」

「あはははは。『浅間くん』はね、これを飲んで『研ちゃん』になつたんだよ。

私を裏切つた浅間くんじゃなくて、絶対に私とことはを裏切つたりしない、研ちゃんになつたんだよ。あんな風に」

赤く染まる視界の端に、楠を組み伏せる浅間の姿があつた。大顎が開かれ、伸びた舌が楠の白い鎖骨を這う。楠が助けを求めて叫んでいるようだが、もうなにも聞こえない。

「や、止めが……が」

激痛を伴い、脳内で見たことのない風景が弾け、消えていった。

これは、藤原惟の記憶？

「あなたにも見える？ 親友だと思つていた人に裏切られて犯された、私の記憶の断片。これを見れば、あなたは私に同情するしかなくなる。そうなつたら、浅間くんが研ちゃんに生まれ変わったように、あなたも私たちの仲間になれる。あそこで研ちゃんに押さえられてる子を殺す事だつて、何とも思わなくなる。

もう、聞いてるかどうかは微妙けれど。お

やすみ な

すぐ耳元で藤原が囁く。

ダメだ、この風景に、声に惑わされては、浅間のような、あんな姿になつてまで生きるの。ましてや、俺の手で楠を殺してしまうなど……！

だが徐々に眼は光を拒絶し、耳は音を拒絶していく。

思考は光と約束を屋上に、空へ夕方や浅間研明で破瓜。やがて、裏切りと髪留めと慟哭。

6・庶幾う声無き慟哭

・こいねがうこえなきどうこく・

西の空が茜色あかねいろに染まり始めた放課後。人氣が少なくなった屋上への階段を、私は軽い足取りで登っていた。

なんだこれは

新年度が始まって、今日は最初の授業が行われた。久しぶりの授業でみんなは疲れが溜まってたみたい。

これは、藤原惟の記憶……？

でも、私は授業の疲れより、浅間君とまた同じクラスになれたのが嬉しかった。私は頬が少し綻ぶのを感じながら、涼しげで優しいような顔の彼を思い浮かべる。

一人の男の顔が脳内で再生される。浅間研明

いじめられていた訳ではないけど、小さい頃から内気な性格だった私は、いつもなんとなく周りと同染めなかった。そんなとき、いつも私に話し掛けてくれたのが幼稚園からずっと一緒に、浅間君だった。

正直、彼に救われた部分は大きいと思う。内気な私を引っ張って行ってくれる彼がいなければ、今では典型的ないじめでちゃんだっただかもしれない。

今では彼とは性別を越えた親友だと思っている。友達の人かかは異性との友情は成り立たないって言うけど、私はそうは思わない。だって実際に私と浅間君で成立してる。私は、そういうの素敵だと思うな。そんな彼に、相談があるから放課後に屋上で、って言われたから、私は屋上へ向かっている。私が彼を頼ることがあって

も、私を頼ってくれることは少なかったから、少しでも彼の力になれることが嬉しかった。

そんなことを考えてる間に、屋上への扉に着いた。本来は施錠されているはずの屋上は、誰かが鍵を壊してから修理も行われず、事実上解放されている。この学校では告白スポットとしても有名だ。

扉を開けると、春先の肌寒い風が髪を優しく撫でた。三日前の十八歳の誕生日に彼がプレゼントしてくれた髪留めに、指がそっと触れた。

新しい校舎の屋上に立つ塔屋を出て、そこにいるはずの人の姿を探す。

あ、見つけた。

彼は屋上の金網に手を掛けて校庭を見下ろしていた。私はいいことを思い付いて、彼に気付かれないように、猫みたいにそっと歩く。

「浅間君、なに見てるの」

「うおわっ！ って惟か、脅かすなよ……」

へへ、成功。思った通り、浅間君は驚いてくれた。

「ゴメンね！。なんかつい。それで、相談ってなに？」

私より頭二つくらい高い浅間君は、茶色っぽい髪をくしゃくしゃと掻きながら、小さな息を吐いた。なんだか、結構思い詰めてたみたいだけど、大丈夫かな？

「あ、えと、まだ心の準備が……」

私が頭にはてなマークを浮かべていると、浅間君は何回か深呼吸して、絞り出すような声で、話し始める。いつも堂々としている彼には珍しい。

「あ、あのな、惟、いや、藤原」

「なあに、急に改まって」

普段は見られない彼のそんな反応が面白くて、私はまた頬を緩める。

「じ、実は……」

夕日が眩しい。逆光で浅間君がどんな顔をしているのかわからな

い。

「その、お、オレと……」

一瞬、強い風が吹いた。スカートが捲れそうになったから慌てて押さえたけど、それでも、浅間君の声はちゃんと聞こえていた。

「……オレと、付き合ってくれ」

もう一度、春先の冷たい風が、私と浅間君の間を駆け抜けて行った。

急激な目眩めまいに藤原の記憶が反転、視点が渦を巻き逆転し、俺の眼に藤原惟が映る。次は、浅間研明の記憶か

言った。ついに言ってしまった。まだ心臓が早く打っている。

強い風が吹いて、惟に上手く聞こえたか心配だった。でも惟はさつきからひたすら俯いている。上手く伝わったらしい。よかった。

「……」

惟の唇がか細い声で、ゆっくりと言葉を紡いだ。俺としたことが、惟の言葉を聞き逃してしまった。

「ごめん、今何て……？」

惟は再び黙る。

夕日の所為か、それとも照れているのか、惟の顔が赤い。俯いている惟の表情は、うまく読めない。

惟の唇が、何か言葉を紡ごうとして、躊躇う。よく見ると、惟の唇が、唇だけじゃなく、惟自身が震えていた。風が、止んだ。

「……」

「……え？」

風の無い静寂の中、屋上のコンクリートの床に水滴が当たり、砕けた。

「友達だっ、て……親友だっ……思って、たのに」

爆発した藤原惟の感『痛い』情が再び流『何故浅間くん』れ込み、神経が灼『どうしてッ!?』かれ、俺の感情『惟殴る血血血血』が犯される激烈な痛みが奔り『怒り痛み』発狂しそ『怒怒怒怒怒怒怒怒』うだ。それでも、俺の意識とは関係無しに再生され続ける藤原惟の記憶から眼を背けることもできず、俺はただ

ずいぶん長い時間気を失っていたみたいだ。見上げた空が群青色になってきている。

ぼやける頭を揺り起こされて立ち上がるうとするけれど、何かに押さえられて動けない。あれ、そういえば私、どうして屋上なんかで寝ているんだっけ……?

顔に落ちた水滴と胸に感じる空気の冷たさと熱で、急激に頭にかかった靄もやが晴れていく。

「あさ、浅間くん、なに、なにしてるのっ!? やめてッ!」

頭から血を垂らした浅間くんが、私の制服とショーツを脱がせて私の胸にキスをしていた。浅間くんは私の言葉を無視して舌を肌に這わせていく。

浅間くんがキスをしたり甘噛みする度に、首筋に甘い電流が走って身体が跳ねるけど、覆い被さられているから動けない。

「やめて、浅間くんやめてよう……」

浅間くんがどうしてこんな酷いコトをするのか、私には分からなかった。

「……おまつ、お前が悪いんだ! 付き合う気なんか無い、くせに! 気があるような素振りをしてきて、ただ勘違いしてた、バカなおれはこのザマかよ!」

「そんなこと知らないよお、あつ、やめて浅間くん、ダメッ……!」

私の中に熱く堅くなった浅間くんが侵入してくる。嫌、嫌嫌、嫌嫌嫌嫌ッ!

無理な体制からじゃ必死に浅間くんから離れようとしても、全然力が入らなくて、少しずつ浅間くんが入ってくる。

肉がうねり、浅間くんが前後動く度に粘着質な音が出る。熱い。抵抗しようとしたら、浅間くんは左手で髪の毛を掴まれて殴られた。さらにもう一発、それからもう一発。脳しんとうを起こしたのか、世界が揺れていた。聞こえないはずの声も聞こえてくる。

幻聴というやつだろうか。

私は声を出すことすらできずに、泣いた。目から熱いものが零れる。ぐらぐら揺れる、涙でぐちゃぐちゃになった柴賀市の夜景がキレイだった。今日は新月なんだ。

多分、助けてと叫んでも、この時間なら誰も来ないだろう。

私のおしりを掴んだ浅間くんが痙攣して、白く濁ったものがなかに吐き出された。萎しぼんだ浅間くんが引き抜かれていく。

私の大切なもの、無くなっちゃった。汚されちゃった

「お前が悪いんだ……そんな、そんな目でオレを見るな……」
涙はもう出なかった。

「こんなコトをされたんだ、オレのことが嫌いになっただろう？！
言えよ、『大嫌い』って！」

こんなコトをされても、私は浅間くんが大嫌いと言うことが出来なかった。

そんなことをすれば、今までの楽しかった思い出も、プレゼントされた髪留めも、何もかも、捨ててしまわなきゃいけないから。

私にとって『浅間くん』は、既に『藤原惟』の大半を構成する要素として組み込まれている。浅間くんを否定することは、私自身の肉を、私自身の身体を切るのと同じだった。

そんなこと、できる訳がない。

「……なんだよ……」

浅間くんが震えている。

「言えよ！ 嫌いになっただって！」

頬を蹴られた。浅間くんからプレゼントされた髪留めが外れた。

「……こんなモノ、プレゼントするんじゃない……！」
髪留めを拾った浅間くんが腕を振り上げる。

「やめて！ 返して、返してよッ！ お願ッ！」

髪留めはフェンスを越えて、夜の柴賀市に消えた。

私は膝について、一度は止まった涙をぼろぼろと零す。

私は泣いた。

浅間くんがいつの間にかいなくなっても、泣き続けた。

亡くしちゃった、私の欠片カケラ。壊れちゃった、私の私自身。誰にも

聞かれることのない私の慟哭は、殊葩ことばが救ってくれるまで月にすら

聞かれず、鬱ふさがれた夜に響き続ける。

7・零れた涙は顔に入らず

- こぼれたなみだはおとがいにはいらず -

床のタイルの冷たい感触が意識を現実に呼び戻す。悶絶しながら部屋の壁際まで移動していたらしい。眼鏡はどこかへいつてしまっていた。

なにか硬いものに頭をぶつけて神経が悲鳴を上げ、情けない声が漏れる。徐々に記憶が蘇る。

脊髄を介して脳内に入ってくるイメージ。言葉。映像。音声。

自分の欠片とも言える程の親友に裏切られ、殴られ、蹴られ、犯され、妊娠した。そして、一つの感情が紡がれる。

可哀想。

憐れみが全身を駆け抜け、思考を一色で統一していく。

外部から脳に藤原の声で直接伝わる指令。まずあの女を殺せ、と言われるままに指示された方向を見た。大蟻に組み伏せられた人間が1人。

ああ、あいつか。

俺はすぐ傍に設置されていた消火器を拾い上げる。手に持つと結構な重量があった。充分な凶器だ。

さつきはこれに頭をぶつけたのか。

なんだ、視界が揺れる。違う、立ち上がるうとして俺が倒れたのだ。

『楽しいか』

もう一度俺は立ち上がり、身体を引き摺るように人間に向かって歩く。

『面白いか』

人間が誰かの名前を叫んでいるようだが、俺には関係ない。

『満足か』

「圭 …！」
楽しい。面白い。藤原の声に従う度に、脳が満たされ、快楽に酔う。人間を押さえつけていた浅間が退いた。よく見ると、腹には鉄槌子が刺さったままだ。

「圭 …！」

頭に響く声と人間の声が鬱陶しい。苛々する。俺は日々の退屈から逃れるべく、浅間と藤原に関わることを望んだ。藤原は誰からも否定されない世界を望んでこの場所を手に入れた。浅間は後悔と孤独感から、架空の世界に逃げ込み、償いに藤原に服従することを望んだ。すべては各々が望んだ結末へ。

鈍器の代わりに、俺は消火器を振り上げる。真下では楠が脅えていた。

「圭 …！」

藤原に言われるままに服従することは楽しい。このままこの手を振り下ろすのも面白い。俺はこの状況に不満は無い。

俺は楠の頭に消火器を振り下ろす。
時間が、止まる。

ああ、そうか。そういうことか。

藤原に従うことは至福で心地よい。

だが、気が付いた。

気が付いてしまった。

同情？ 馬鹿馬鹿しい。

そう、足りない。決定的に、足りていない。

「圭ちゃん！」

俺は慣性に逆らい、振り下ろした消火器の軌道を力で捻じ曲げ、左足を軸に身体を180度回転。楠とは真逆の方向、浅間に向かつて全身全霊を込めた一撃を振り抜け、振り抜いたッ！

あまりの衝撃に手が痺れ、思わず消火器を手離れた。そして脊髄^{せきずい}を駆け抜ける快感。

「ハッ、クハはははははははは！」

どうしても我慢できず、残酷な哄笑^{こうせう}が溢れる。見ると、丁度、鎚で杭を打ち込んだように、鉄槌^{てつち}が浅間の胴体に深々と突き刺さり貫通していた。足元に転がる赤い消火器は大きく歪んでおり、衝撃の大きさを物語っていた。

「圭、ちゃ、ん……？」

「下がってる」

そう、一言だけ楠に言うと、俺はもう一度足元の消火器を構える。胴体を鉄槌子という巨大な杭で貫かれてなお、浅間は絶命^{ぜつめい}していなかった。虫らしい大した生命力だ。

悶えながら、血を吐きながらも、ゆっくりと俺と楠に近づいてくる浅間。その頭部目掛けて、俺は消火器を振り下ろす。もはや躊躇^{ちゅうじゆ}は無い。

甲殻がひしゃげる。もう一度振り上げ、振り下ろす。頭蓋^{ずがい}が割れ、血が吹き出す。脳が潰れ、眼球が飛び出す。脳漿^{のうじやう}にまみれた消火器を振り上げ、振り下ろす。大顎^{おほあご}が潰れ、辛うじて人間らしさを留めていた歯が折れる。浅間が痙攣^{けいれん}しながら右腕を掲げたので、振り上げ、振り下ろし、根元から叩き折る。

ようやく大人しくなった浅間には、頭と呼べる部分は無くなっていった。司令塔を失った虫類の四肢は力無くうなだれる。

浅間を貫通した鉄槌子を掴み、浅間の胴体を蹴って引き抜く。勢い余って、背中から転げた。倒れたまま、俺は歪んだ口元を隠し、言う。

「くっははは！ 最高の気分だ」

脳に作用する、エンドルフィンという神経伝達物質がある。痛みを和らげる鎮痛剤として働き、満足感をもたらす物質である。また、長時間走りつづけたマラソンランナーの気分を高揚感をもたらす、ランナーズハイという現象を引き起こす要因でもある。

俺はその域にまで達したことはないが、恐らく今の気分がそれに限りなく近いのだろう。先程まで思考を塗り潰していた痛みも恐怖も、今はBGMのようで心地良い。

藤原が愕然として視線をさまよわせる。どうして命令に従わないのか、理解不能といった様子だ。そんな藤原に俺は言ってやる。は、気分がいい。

「一時はお前の境遇に同情しそうになったが、止めた。くだらない、実にくだらない」

「くだらない、……？」

馬鹿馬鹿しくなつて、俺は言ってやる。

「ああ、くだらないな。お前は、浅間の内心を知ろうとしなかった。お前が気に入っていた髪留めや、普段の浅間の行動。お前が浅間からの友情以上の好意に、気付くことは難しくなかったはず。いや、むしろ、お前は浅間の好意に気付いていたのではないのか？」

もしかすると、この件で一番の被害者は浅間かもしれないな。まあ、確かに、世間一般から見れば責任を負うべきは浅間研明だ。事の発端は奴の暴走にあると言える。が、単純に関係の進展を試みた浅間は、お前に拒絶され、その理由すら知らされなかった。お前は浅間に責任を一方的に押しつけ、被害者面で他人が同情してくれるのを待っていた。脆弱で矮小^{せうじやくくわいせう}で、汚らしい。

学校や社会といったコミュニティに上手く馴染めないとき、頼りない存在という役を演じ接することで浅間の庇護欲を誘い、飽くまでも奴が自主的に庇ってくれるような話し方、表情、仕草をする。やがてその宿主を喰い殺す、寄生虫。それがお前だ藤原唯！ うずくまってベソかいてりゃ、誰かが手を差し伸べてくれると信じてい

にしよう。全力で掛かってこい。抵抗した分だけ残り少ない寿命が延びるかもしれんぞ」

鉄槌子を握り直し、姿勢を低くして駆け出す。眼前に迫る鋭利な尾を上体を捻るだけで回避し、左足を踏み込んで大振りに薙払う。藤原が跳ね、既すんでの所で直撃を避けるが、逃げ遅れた肢を二本纏まとめて刎はねる。

血の軌跡を描いて落下する藤原を狙い投擲した鉄槌子は、黒い魔鳥となって飛翔し、藤原の眼窩がんかに吸い込まれるように寸分狂わず突き刺さる！

痛みでもがく本体をよそに、無防備に転がる尾の先端部を踏み割り、砕けた尾の先端部を臂力かみぢりで引き千切る。聴覚を持って生まれてきたことを公開するような悲鳴も、今は心地よい。俺は尾を放さず掴んだまま、加速をつけて頭上で旋回させ、そのままコンクリの床に叩き付ける！ まだだ、まだ足りない。藤原を徹底的に、生かしたまま壊す。

「け、圭ちゃん、もう止めて！」

今まで一部始終を傍観していた楠が、耐えられなくなったのか、俺にしがみつく。お蔭で藤原の尾を握った腕が振れない。

「何を言う、こいつはお前を殺そうとしたんだ。この程度で許される道理が無い」

離れる様子がないので、腕にしがみつく楠を力で跳ね飛ばす。怪我をしないように手加減をしたつもりだが、細かいことは知らない。

「いば、いべ、いべん、な、ざい」

今更、懺悔ざんげしても遅い。頭蓋かんぼつが陥没した藤原を引き摺りながら、俺は部屋中央の白い球体、繭に歩み寄る。血で引き摺った痕ができていた。藤原にとって、この繭が大切なものである事は間違いない。ならば、それを藤原の目の前で潰してやろう。

「コンの、アホオオオッ！」

後頭部に始まり全身を揺らす、今は痛みにもならない痛み。音と感触から、楠に空のバケツで殴られたことがわかった。途端に全身

の力が抜け、握っていた尾を離してしまう。

間の抜けた音と空気を読まない楠の行動で、頭の上っていた血が急速に退いていく。同時に暴走していた思考に理性が戻って来るのが分かった。

「うおいハル、何のつもりだ！ 一体なにし……」

楠を見た俺は、それ以上続ける事ができなかった。涙こそ浮かべていないものの、震える楠は今にも泣き出しそうな顔をしていた。そして、緊張の糸が切れたようにその場に腰を落とした。

俺は今まで溜めていた息を深く吐き出し、肉の残骸になった藤原を見据える。

流石にちよつとやり過ぎた、か？

「あ、かは、」

「うおっ、つくづくしぶといな」

楠が俺のコートの袖を掴む。分かっている、もう藤原に手を出す気はない。もつとも、俺が手を下さなくとも、藤原が致命傷であることは明らかだが。

藤原が震える指先で繭を指し示す。脳内に割り込んでくる羊水にたゆたう人間の赤ん坊のイメージ。まさか、これが繭の中身だというのか？

繭を指差す藤原。その言うところを気付いた俺は、愕然とした。この繭の中身は、藤原の記憶で見た赤ん坊か。そして、藤原は俺に繭を保護しろと言っているのだ。俺はもう一度藤原の姿を見、ぞつとする。今の藤原と浅間を見る限り、繭の中身が人間の形だとしても信用できない。

大 丈 夫……

……！ 頭に直接響く藤原の声。

この子は 大丈夫……

藤原の瞳から急速に意思の光が失われていく。

「浅間くんに会ったら、謝らなくちゃいけないな。ごめんなさいって。許してくれる訳、ないんだけどね……」そんな声が聞こえた気がした。藤原の輪郭が崩れ、黒色の固体とも液体ともつかないものの分解され、暗闇に沈んで、消えた。見回すと、浅間の死体も見当たらなかった。

「消え、た……？」

あれほど血を流し、肉片をバラ撒いた浅間も藤原も、消えてしまった。まるで悪い夢でも見ていたようだ。床には少々曲がった鉄槌子が無造作に転がっていた。俺は振り向いて気付いた。

「待て、どうして繭が消えていない」

突如、縦に亀裂きれつが走る繭。大量の羊水が溢れ出し、床を水で浸していく。楠が驚いて飛び退き、俺の後ろに回った。中から出てきたモノに、俺は自分の目を疑った。そういえば眼鏡が無い。

焦茶色の髪。細く伸びた四肢。まだ膨らみきらない乳房。羊水に濡れて光沢を得た白い肌は、どこか艶めかしさを感じさせる。中から現れたのは、一糸纏まとわぬ姿の少女だった。薄い肩が上下していることから、呼吸はしているようだ。ううむ、目の保養ほよう。

「お、お前は見るなアアア！」

我に返った楠が俺に回し蹴りを放ち、ヒット。何故蹴る！？そして、俺はそのまま素直に水浸しの床に倒れた。楠に襟首をひっ掴まれた俺は抵抗の甲斐なく、着ていたコートをひっぺがされ、裸身の少女に提供する羽目になった。

藤原が言っていたのはこういう事か。

楠が少女に俺のコートを着せている間に、俺は落ちていた眼鏡を発見し、掛ける。幸い、レンズは無傷だ。

「で、俺のコートなんて着せて、どうするんだ、ソイツ」

「どうするって、このままにはしておけないでしょ」

待て待て待ておかしい。ソイツは藤原と浅間の子だ。目を覚ました途端に牙を剥いて襲いかかってこないとも言い切れない。

「きつと藤原さんは、この子だけでも生かそうとしたんじゃないかな」

何をわかりきったことを、と言いかけるが、楠は藤原の記憶を見ていない。浅間と藤原の行動から推測したのだろう。

「だったら何だよ。そんな危険因子、燃やすか潰すかした方が世の中の為だと思うけど？」

「どうしてお前はそんなに短絡的なのかねえ」

俺を見て微笑む楠。何だかすごく嫌いな予感がする。

「圭兄、今日駅で会ったときの約束、覚えてる？」

駅でした約束……？ ……あ。

「待て待て待て待て待て！ いくらなんでも状況が状況だぜ！？」

お前こそ、もう少し考えて喋ろうよ！？」

「大丈夫だよ」

楠の眼に一瞬寂しげな影が差す。

「なんで言い切れるんだよ」

「……だってこの子、もし私たちを攻撃しちゃったら、本当に居場所が無くなっちゃう。本当の居場所は、壊しちゃったし……。それに、圭兄はこの子を殺せるの？」

反論しようとして、言葉に詰まる。常識が通じる相手とは思えないけどなあ……。居場所を荒らしたのは紛う事なく俺ですけれど。

無防備な人間、しかも女を殺すのはいくらなんでも……。

……

……。

……。

……。

「まあ、千歩譲ってソイツを連れ帰るとしよう。だけど、どこに連れ帰るんだ？ お前んちは無理だってまさかお前」

満面の笑みで笑う楠が、そこにいた。

「んでもって、どうせ俺がそいつを負ぶって帰ることになるんだろ
うがド畜生！」

海よりも深い溜め息を吐く。何だか目が熱くなってきた。

ケータイを見ると、電波が回復していた。新宮の父親から何かあったか、とメールが着ていたが、後で間違い電話だったと返信しておこう。

「おい、置いていくよー」

俺はハイの状態から落ちに落ち込んでいるというのに、どうしてあいつはあんなに元気なんだ？

俺は俺のコートを着せられた軽い身体を背負う。藤原と浅間の子供一（しかも人間じゃない！）だと分かっているけど、背中に当たる柔らかい感触でオトゴゴコロが微かに揺れる。だがそんな俺を誰も責められはしない。

さつきから楠のペースに振り回されっぱなしで忘れかけていたが、足元に転がっていた鉄槌子も一緒に持って行くことにした。

いくら夜中だとはいえ、俺の家まで誰にも見つからずに行けたのは小さな奇跡だと思う。

その後、楠に少女の処置を任せ、俺は服も着替えぬままりビングのソファに倒れ込んだ。

何かを考えるには今は疲れすぎている。意識が泥のように融けはじめる。

8・小唄の残滓

「こつたのざんし」

カーテンの隙間を縫って差し込んできた白い朝日が眼を灼く。暑い、眩しい。なんかデジャヴ。

壁に掛けられた時計の針は七時に少し前を指していた。汗でへばりついたソファが気持ち悪くなって身を起こす、と普段あまり使わない筋肉や節々までもが鈍く痛む。

傷だらけの腕を掲げて拳を作り、開く。擦り傷や痣のある腕や脚、その筋肉を伸縮運動させ、結論。筋肉痛と、頬を初めとする数ヶ所の打撲。他は左手中指の突き指と左足首の捻挫に擦り傷、切り傷が多数。と自己診断。

「あ、起きたんだ。おはよー」

背後からの声に振り向くと、エプロンを掛けた楠がいた。手には葱と包丁。

「おはよー、じゃねえ。お前は人ん家で何をしているんだ」
「料理」

その格好を見りや分かる。俯いて頭を搔くと、膝の上に砂と固まった血が落ちてきた。

「お風呂、沸いてるから入ってきたら？　いつまでもそんな格好じゃ気持ち悪いでしょ？」

俺は一体どんな格好をしているんだ。寝汗でべとつく体と、昨日の事を考えれば何となく予想は付くが。これ以上考えると、大変な不安要素まで思い出しそうなので思考を停止。楠の気遣いに感謝でもしておこう。

「話しはそれから、か。じゃ、ありがたくひとつ風呂入ってくるわ。覗くなよ」

お約束の台詞に楠が呆れ顔を反転させ、台所へ戻っていく。脱衣所に移動し鏡を見ると、青痣を頬に拵え、寝癖と乾いた血で混沌とした顔に、陰鬱な表情を浮かべた男がいた。あははは変な顔。早く洗おう。

強烈なメンソール臭を漂わせた、いつもとは確実に何かが違う食卓。

些が大袈裟な気もするが、比較的深い切り傷があつた右手腕には包帯を巻いてある。包帯の下で傷が疼いた。楠よ、手当てをする気があるのなら、清めの塩とか言つて切り傷に塩を塗り込むような真似だけは止めてくれ。頼むから。

「で、そろそろ説明してほしいんだが」

「そこ、口に入物を入れて喋るな」

楠が用意してくれた朝食を頬張りながら、ダイニングテーブルの真向かいに座る彼女に尋ねるが、箸で指されて注意された。お前こそマナー違反。飲み込んで尋ねる。

「まず、何故お前がこの時間に俺の家にいる。そして出汁だしに使う煮干しは頭だけではなく腑はらわたも取り除け。苦い」

「前半の答えは昨日はお前の家に泊まつたから。後半は精進する」楠の口から聞き捨てならない言葉が吐き出される。あまりに平然と話すので反応が遅れた。

「待ちーな。ここに泊まつただと？ お前、おばさんやおじさんには何て言つたんだ？」

「圭ちゃんが熱出したから、今夜は看病のために圭ちゃんの家泊まる、とだけ。『圭輔ちゃんなら安心して任せられる、バッチリ決めてこい』だつてさ」

「どつという意味だ、畜生そつという意味か。信頼されていることを誇

りに思うべきか、勘違いされていることに自暴自棄になるべきか、男としては悩むところだけど。お前相手に欲情なんてするか」

「そろそろ私が彼氏持ちだってこと、言った方が良いのかもね」

「とことん他人事だな」

美味くも不味くもない食事を流し込んでいく。やや摂食を拒絶気味な胃には、朝食が粥であることはありがたかった。湿布薬の所為で嗅覚が麻痺している事に加え、全身が痛む。俺としては早く横になりたかった。

「ご馳走様」

「お粗末様でした。あ、食器は置いて。後で纏めて洗うから」

楠の言葉に甘え、食器を流し台に置く。蓋が開いた土鍋の中には、まだ粥が残っていた。不思議に思い、尋ねる。

「なんだ、分量を間違えたのか？ まだ残ってんぞ？」

思い出したくない記憶が浮上しそうになる。ダメだ、別のことを考えて誤魔化せ俺。

だが、楠の口から出てきたのは残酷な一言。

「あ、それはあの子の分。目が覚めたらお腹が空いてるかと思って、ついでに言っと、今は圭兄のベッドに寝かせてあるから」

ヒトの寝床に得体の知れないモノを入れるなよ！

どこまでも呑気な楠の答えに軽く目眩と大さじ三杯分の殺意を覚えた俺は、弱々しく苦笑いを返すしかなかった。

扉を挟んだ向こう側から、規則的な寝息が絶えず聞こえてくる。

昨日拾った鉄槌子を片手に構え、震える手を把手に伸ばす。自分の部屋に入るのに、どうしてこんなに緊張しなければいけないのかは謎。

警察の特殊部隊ならドアを蹴破って突入するのだろうか、自分の部屋の戸をブチ破っても不利益にしかならないので、初めからそんな選択肢はない。

「おい、入らないの？」

楠よ、お前は少し黙ってる。昨日のあれほどの体験をして、まだ話したこともない相手に心を開いている、そんな楠の神経が信じられない。でも楠の言うとおり、いつまでもこうしている訳にはいかない。腹を括って把手を捻り、中に入る。

楠の話通り、昨日の少女が俺の寝台で眠っていた。俺はその淫色くりいろの髪に、どこか藤原惟の面影を見た。滑らかな頬の曲線は雪原。病的とも思える白皙に反比例するような、赤く小さな唇。幼さの残る顔立ち。簡単に支配できそうな細かい四肢は、見たものの逆説的な庇護欲を誘う。漫画の中なら、男子が毎日のように学校の下足箱に恋文を入れていそうな、そんな容姿だった。

俺は幼い子供が嫌いだ。

嬰兒えいじが笑顔を向けてくると、多くの大人は無条件にその子供に対して笑顔を向け、優しい表情と言葉を掛け、抱き上げる。

生まれたばかりの新生児が、意識して大人の愛情や保護を得る為に笑いかけてくる訳ではないのは解っているのだが、無力な嬰兒が親をはじめとする周囲の人間の庇護欲を誘う、そんな生命維持の行為自体が、俺にはどうしても打算的で、本能を巧みに利用したある種の洗脳行為のように感じられてしまい、形容し難い嫌悪感を覚える。自分で言うのも何だが、人間の線引きをかなり踏み越えた思考回路だと思う。

「……いつまでヒトのベッドで寝ているつもりだ、こいつは」

「私に聞かないでよ」

苦々しい舌打ちの後に、再び寝台の眠り姫を見据える。耳元で目覚ましのアラームを最大音量で鳴らしてやろうかしら？

一刻も早く俺の寝台から追い出したい衝動に駆られていると、少女の長い睫まつげが小さく震えた。今まで眠りこけていた少女の臉おもむろが徐に開く。

「あ、起きた？」

少女の瞳が俺と楠を順に捉え、無言の視線は宙にさ迷う。

「ええと、まずは自己紹介かな？ 私は楠、楠遥香。こっちの朴念仁は圭ちゃん」

「誰が朴念仁だ。この唐変木は放っておいて、単刀直入に聞こうか。俺の言葉は解るか、お前は何者だ」

俺と楠のやりとりで少しも表情を変えない少女は、寝台から身体を起こすでもなく、嫌に落ち着いた様子で俺を見つめ返す。まともな答えが返ってくるとは期待していなかったが、本当に何も答えないとは。そもそも喋れるのか、コイツ。

唐突に脊髄を奔り抜ける、神経を無理拡張する痛み。頭蓋の内壁に反響する声、思考、意志。頭に直接語りかけられる不快感。これは、昨日と同じ……？

こ　と　は

「……殊葩……？」

「ちょ、圭ちゃん大丈夫？」

「あ、ああ。お前は、何も聞こえなかったのか？」

楠は俺の言っていることが理解できないのか首を傾げた。俺にしか聞こえていない……？

加えて、音声だけではなく、名前の漢字のイメージまで脳内で再生された。『ことは』がこの少女の名前であることも、何故か理解してしまっていた。

空腹

「……は？」

今度はその二文字が再生される。同時に、薄い少女の腹が自己主張した。

「あ、お腹空いたのかな。私、下から残りのお粥、暖めて持つてくるね」

返答する間もなく、楠は俺の部屋を出て行った。取り残された俺は寝台からなるべく離れて床に腰を下ろす。楠の言うとおり、この少女からは敵意が感じられない。念のため、いつでも鉄槌子を構えられるような位置を確保しておく。

無意味な沈黙。

少女は相変わらず俺を見詰め続けている。そんなに見詰めるな。気色悪い。

「殊葩……藤原が何度か言っていたな。それがお前の名前か」

肯定

どうやらそうらしい。気が付けば先程の不快感も無くなっていた。理由はわからないが、俺にはこの少女の声が聞こえるようだ。心当たりが有るとすれば、昨日藤原に刺されたあの時……。首筋の傷に触れると、もう止まっていたが、包帯に少しだけ血が滲んでいた。

空腹

「あーハイハイ。もう少しで楠が粥を持ってくるから、少し黙れ」
蜘蛛女の次はテレパシー少女かよ。非日常の連続でいい加減慣れた。少しは驚くべきだろうか？ 階段を登ってくる楠の足音。

「はい、お粥持ってきたよー。って、そんな隅っこで何してんの？ こっちに来れば？」

「気にしてはいけない。お前の横より部屋の角が好き」

楠が匙で粥を掬って少女に差し出すが、少女は口を開かない。そんな楠に俺は冷ややかな視線を送ってやる。

「お前、保母にはなれんな」

「黙れ。ほら、ご飯だから。お口あーんして、ね、ね？」

「俺は堪えている、必死に笑うのを堪えている」

「う、うるさいなあ！ そこまで言うならお前がやってみせなさい

な

「コイツ、俺の子供嫌いを知って言ってやがるな。殊葩が請うような瞳で俺を見詰めてきた。そんな目で俺を見るな。仕方無く、俺は楠から匙を受け取る。」

「まずは身体を起こすべきだろうが、常識的に考えてよ」

俺は殊葩の身体を起こすべく、布団の中に手を差し入れる。

「……ハル、まさか布団の下は全裸って事は……」

「あ、大丈夫。お前が使ってなさそーな服を選んで着せておいたから。下着は私のを」

楠より一回り小さいこいつに、楠の下着のサイズが丁度って、何とも思わなかったのだろうか？ 布団から上半身を出し、壁に背中を預けさせる。殊葩は抵抗せず、身体は簡単に持ち上がった。屈んで、殊葩と目の高さを合わせる。

「おら、口開ける」

警戒

「その子、怖がってるんじゃないの？」

「お前より2割くらいマシ。大丈夫、毒じゃねえよ、ほら」

そう言って、俺は粥を一口食べてみせる。

「な。口、開けな」

殊葩は上目遣いでしばらく躊躇っていたが、やがておすおすと口を開き、舌先で粥を舐め、漸く口やじちに含んだ。やれやれ。

「粥だから、あんまり必要は無いけど一応噛みな」

殊葩は言葉の意味が理解出来ないのか、首を傾げてみせた。むう、どう伝えればよいものか。あ、思い付いた。

俺は俺の額と殊葩の額を触れあわせ、目を閉じて集中。ものを咀嚼そしするイメージを、出来るだけ鮮明に想像し、方向性を持たせる。

理解

俺が額を話すと、少女はゆっくりと粥を咀嚼し始めた。

「よし、良いぞ。次は呑み込め」

同じ様に、ものを嚥下するイメージ。

喉を動かし、少女は口の中の粥を呑み込んだ。なんか疲れた。

「圭ちゃん、どうやったの?」

「ふ、目で見えるモノだけが全てでは無いという事だ。魂の眼で感じ、魂の耳で聴き、魂で会話するのだ」

「うわあ、嘘臭え」

昨日、藤原から送られてきた思念を俺の側で遮断できた事から、こちらからでも思念に干渉できるのではないかと思ったが、どうやら上手くいったようだ。

……待てよ?

こいつは噛む、呑むと言った動作の『意味』が分からなかっただけで、教えてやる事ができれば、こいつも実行する事ができた。俺はもう一度、脳内で念じてみる。

「……あう」

「うおっ、喋った!?!」

やっぱり喋れない訳ではなかったらしい。

「言葉、解るか?」

同時に頭でも念じてみる。ちゃんと言葉で肯定しろ、という指示も忘れない。

肯定

「違う。お前には何のために口が付いている、喋ってみせろ」

「圭ちゃん……?」

少女はしばし迷い、口を酸欠の鯉のように開閉する。

楠は不安げに固唾を呑む。

「あ……は、あは、い」

「……よし、上出来だ」

呼吸音混じりで上手く喋れたとは言えない域だったが、まあ、上等だろう。子供は誉めた方が伸びるらしいし。

俺が手を伸ばして髪を解くように撫でてやると、殊葩は嬉しそうに眼を細めた。

「さあて、次はお待ちかねの質問タイム」

そう言いながら、俺は殊葩の口に付いた米粒を拭ってやる。

「いくつかお前に質問する。ちゃんと言葉で答えるんだ、いいな？」

「……はい」

一体何から聞くべきか。多過ぎて質問を絞れない。まあ、基本的な事から尋ねていこうか。

「まず、名前は？」

俺はもう知っているが、楠は知らない。一々説明するのも面倒なので、ここから聞いていこう。

「殊葩（こと、は）」

「コトハちゃんって言っただ。あ、あの時藤原さんが言ってたのって、名前だったんだ？」

「そうらしいな。次、お前は人間か、人間ではないか、答える」

殊葩は少し逡巡し、俺の表情を確かめるようにしながら「人間じゃない、けど、人間」と答えた。訳が分からない。昨日初めて会ったときの藤原や浅間のような状態ということだろうか？

「人間であり、かつ人間でないと言っのなら、お前は一体何だ、俺の敵なのか？」

返答次第ではお前を殺す、と言いかけて気が付いた。目の前の少女は見ているこちらが不憫になるほど、はつきりと怯えていた。殺す、という強い意思が俺の表情や口調、あのテレパシーで伝わったのだろう。

楠の言うとおりだった。理解しているかは知らないが、こいつに

とって俺が両親の仇かたきであつても、俺や楠を攻撃してしまつたら、俺はこいつを殺さなければならなくなる。昨日のように楠がそれを制止し、俺が折れたとしても、ここから追い出されることは避けられない。昨日生まれたばかりの何も知らない嬰兒えいじが、無事に1人で生きていけるほど現代社会は甘くない。ましてや、身体と精神の年齢が釣り合っていないこいつを放り出すことは、餓えた狼の檻に兎を放つことに等しい。藤原惟の腕すがという居場所を失つた今、こいつは事情を知っている俺と楠に縊すがるしか生き延びる方法が無いのだ。こいつは、本能的にそれを理解しているのだろう。俺は殊葩から目を逸らし、諦めを含んだ深い息を吐き出す。

「……わかつたわかつた。もう言わないし、追い出したりしねーから、そんな顔すんなって」

お前が大人しくしているウチはな、と付け加えておく。まだ不安を残す殊葩の頭を、俺は優しく撫でてやった。そのまま残りの粥を食べさせてやる。完食。

緊張の糸が解けたのか、殊葩は小さな欠伸をした。俺は殊葩の身体を抱き上げて寝台に寝かせる。

「疲れたならもう少し寝ろ。誰も文句は言わん」

殊葩がまだ何か言いたげな顔をする。分かり易いヤツだ。楠も安心したのか、粥の入っていた器を持って、部屋から出ていった。俺も楠の後に続こうとすると、殊葩に服の裾を掴まれた。

「……イヤ」

「圭ちゃん、どうしたの?」

階下から聞こえる楠の声。

「なんでもない。俺はもう少しココにいるから、お前も一回帰つたらどうだ?」

間。

「うーん、じゃあそつするー。お前、コト八ちゃんに変なコトするなよ?」

誰がするか。お前こそ、帰宅したときの言い訳を考えておけ。

床に腰を下ろしても、殊葩はまだ俺の服を離さない。めんどくせーヤツ。

「大丈夫、寝付くまでどこへも行かぬーよ。だから寝ろ」

殊葩の小さな手から服を離させる。随分強く握っていたのか、皺しわになっっていた。代わりに、その雪原のような頬に触れる。殊葩は若干の戸惑いを浮かべたものの、頬を弛ませて目を閉じ、直ぐに小さな寝息を立て始めた。

かく言う俺も、昨日からの疲労が完全にとれていなかったのだから。傷が少し熱をもっている。膿まないといいけど。

俺は音を立てないようにそっと部屋を出、居間のソファに横になる。体重でソファが軽く沈む。楠がしたであろう、朝食や先の器が小綺麗に片付けてあった。あいつ割といい嫁になるかもな、と思っただが、こういう思考をしている時点で上手く脳が動いていない証拠だ。目を閉じる。

藤原惟と浅間研明、そして殊葩。疑問はまだ何も解決していない。そもそも、これが解決する時は来るのだろうか？ 世間は常に矛盾と不条理に満たされている。それでも世界は止まることなく、惑うことなく、未来というベクトルに不可逆的に進んでいく。

人間は世界ではない。いや、ある意味では世界そのものなのだろうが、しょっちゅう立ち止まるし、前に進んでいるつもりで逆行していることもある。でも、目的地は皆同じ虚無（死）。

なら、そこに至る過程だけでも、俺は『俺』を確立して歩んでいきたい。蟻のように社会の歯車として機能するだけの、凡百の存在には決してなりたくない。

ああ、わかった。だから俺は病気のように楽しさや面白さを渴望して、他人ひととは違う何かを探しているのだろう。そんなもの、滅多に存在しないし、本当は自分で開拓して創っていくものなのに。

でも、俺は道を変えない。その『滅多に存在しないモノ』を、俺

は遂に見つけたのだ。そして、それはこの場に殊葩（現実）という形で存在しているのだから。あいつが更なる非日常を引き寄せる餌（贅）となってくれるのを、俺はどこかで期待しているのだ。

俺の人生は此処から始まると言っても過言ではない。何時始まり何時終わるのかも分からない、これから更なる非日常に遭遇するのか、普通の日常に戻るのか。何が起こるか全く予想がつかない。楽しい。実に愉快だ。

どちらにしろ、出張中の母が帰ってきた時の為に上手い言い訳を考えておかなければならない。学校や藤原のおばさんにどう説明するか、他の問題も山積みだ。

思考を膨らませているうちに、闇の中で俺の輪郭が曖昧になっていく。黒に吞まれる混沌とした世界。

だが、ひとつだけはつきりとしたものがあつた。それは、脳内で再生された映像。3人、手を繋いで歩いている。1人は藤原惟、1人は浅間研明、2人に挟まれた1人は殊葩だった。

これは、殊葩の夢？ いや、殊葩はあの2人の顔を知らない。これは殊葩の中に残る、藤原惟の夢……か。ああ、そうだ。目が覚めたら学校へ行ってみよう。藤原の記憶の中で見た、あの日浅間が投げ捨てた髪留めが見つかるかもしれない。

藤原惟が唄っていた、あの子守唄が記憶の隅から淡く薄く、しかし時に明確に甦ってくる。それは、小さな小さいさな、子守唄の残り滓。砕けて散った、藤原惟自身か。唄を聞きながら眠るのも、存外悪くない。

やがて、意識は、途切れた。

9・やがて黒南風の駆け抜ける季節へ

・やがてくるはえのかけぬけるきせつへ・

「も、もっかい言ってみ？ 階段で足を引っ掛けて落ちて、下にあった角材に頭から突っ込んで怪我したって？ ア、アホすぎる……」
柴賀市営武道館、ロビーの長椅子の向かい側で、ジャージ姿の新宮満が腹を抱えて笑っていた。時折、右手で長椅子を軋むほど叩いている。正直ウザイことこの上ない。

「それで、今日はなんの用だ？ 今日はドコの学校も使っていないからいいものの、弓道場は昼寝場所じゃないんだぞ？」

む、完璧に読まれていたか。柴賀市営武道館の弓道場は午後は日当たりがよく、長椅子も設置してあるため昔は昼寝場所としてよく利用していたのだ。春先などそのまま昇天しそうなほど心地良い。

「まあ、怪我人を無碍に扱うのは心許ないから、今日だけは特別だぜ？」

俺は欠伸を堪えながら、眠気で覚束ない足で立ち上がる。その時、ポケットから何かこぼれた。

「なんだコレ？」

新宮が摘み上げたそれは、ボロボロに錆びた、向日葵の髪留めだった。午前中に学校へ行き、藤原惟の記憶の中で見た風景を頼りに浅間研明が投げ捨てた髪留めを探してきたのだ。3時間半の苦闘の末に花壇の茂みの中から見つけ出した向日葵の髪留めは、土と錆の汚れで見る影も無くなっていた。

広い校庭での髪留めの搜索は思った以上に病み上がりの身体には響いた。この身体では自転車で学校へ行くのは辛いだろうと思い、

学校へは電車を利用して通学したので、駅から近い昼寝場所へ寄ることにしたのだ。そこで練習帰りの新宮に会い、今に至る。本当は殊葩が目覚めた次の日に行くつもりだったのだが、筋肉痛やら怪我の箇所が炎症を起こして熱がでるなどして結局、一五月五日（今日）になってしまったのだ。

「おお、そういえばお前、柴賀東高校だったな？」

その通りだが、何を今更。

「いやなに、実は今度柴賀東に転校してくる知り合いがいてな。お前と同級生で、何かと分らないことも多いだろうから、良かったら力になってやって欲しいと思つてな」

こんな時期に、しかも三年生で転校？ なーんか焦臭い。考えておきます、と言って新宮から髪留めを受け取り、持参していた枕代わりのスポーツタオルを首から提げ、弓道場と言つ名の縁側へ向かう。

寒い。身体がすっかり冷たくなっている。目を擦りながら時計を見ると十六時過ぎ。弓道場で三時間弱寝ていたことになる。日は既に沈み始めていた。こりゃ寒いはずだわ。

違和感。空気の冷たさとは違う、張り詰めた空気。身体を起こすと、射場の中心に立つ人影。

的に対し、九十度右に体を傾けて立つ姿の、身長と起伏のある体付きから女。滑らかな黒髪を、ゴールデンポイントから少し低めに結った横顔は大人びた印象を与えた。女が凜とした表情で矢を弦に添える、『弓構え』の動作。弓を引くとき、傍から見ると、ただ引いているようにしか見えないのだが、剣道や柔道などの型と同じく、細かな決まり事がある。弓道は確か、射法八節と言つのだったか……。

第三節の弓構から、顔を的に向ける『物見』を経て、女が四節の『打起し』へ移行。熱せられた大気が昇るように、ゆっくりと掲げ

る。続く第五節の『引分け』で左手で弓を押し、右手で矢を引く。構えた弓と矢を水平に保ち、芸術のような動作のまま、第六節の『会』へ流れる。黒真珠の瞳は真つ直ぐに的を見据えていた。そして『離れ』。矢は微塵の迷いもなく、流星のように大気を切り裂いて飛翔。吸い込まれるように的の中心を射抜く。黄昏の弓道場に響く的中音。最後に『残心』。

俺は、弓を射った女の姿から、その弓からその矢から、自分以外の何者の立ち入りも許さない、荘厳な息吹が伝わってくるような錯覚に陥っていた。弓を射る人間の呼吸。弓を引く弦の音。極限まで洗練された矢を惜しげもなく放ち、真中に的中する音。そこは俺が話し掛ける余地などない、外とは隔絶された、弓を構える者へのみ許された絶対空間だった。

一部始終を見られていた事に気付いた女が、なにかが気に障ったのか、俺が寝ていた見学者用の長椅子に向かつて歩んできた。

「こんにちは」

「あ、ハイ、こんにちは」

髪型や落ち着いた雰囲気から年上かとはばかり思っていたが、よく見ると弓道着には都立渚高校とつなぎこうこうと俺の知らない高校名が縫いつけられていた。大学生や社会人が、高校名の縫い付けられた胴着を着るとは考えにくい。つまり俺と同じ年か、あるいはそれより下か。

「河野、圭輔さん？」

「へ？ 何で俺の名前を？」

初対面の女子に、いきなり名前を呼ばれて少し驚く。

「私、この連休明けから柴賀東高校に通う事になった、七塚紗心ななつか ささねです。新宮さんから聞いていませんか？」

ああ、ハイハイ。俺の事はあの人から聞いたのね。落ち着いた声色が俺に平静を取り戻させた。

髪を結い上げた項うなじと、ほっそりとした体つき。それに対して、楠や殊葩とは違い胴着の上からでも分かる起伏のある体型。清楚な雰囲気と、本来は真面目な意味合いをもつ胴着は、見たものに倒錯的

な色気を思わせる。うつむ、眼福。

「で、アナタがその転校生さん？ それがどうしてココに？」

「ええ。実は今日、引越しのご挨拶に新宮さんを訪ねたのですが留守でしたので。こちらに居らっしゃるとお聞きしたので。それで、ここでの試射も兼ねて」

「ふうん、なるほどね」

七塚に観察するように、足先から頭まで何度も往復して見られた。いやん。

「立ち話もなんだ。そろそろ冷えてきたし、中で話そうか？ あ、でも練習の邪魔しちゃ悪いかな？」

「いえ、私も丁度終わろうと思っていた所でしたので。では、私は道具を片付けて、着替えて来ますね」

軽く一礼して去っていく七塚。手伝えることも無さそうなので、俺は一足先に武道館の中に戻ることにした。

「やあ圭輔、今まで寝ていたのかい？」

「まだ居たの？」

ロビーに戻った俺に、新宮が陽気な声で話しかけてきた。

「いやあ、今日が例の転校生の引越しの日だって忘れててね。あの後帰ったら丁度入れ違いだったみたいだな」

「さいですか」

にやけた新宮が右腕で俺の肩に手を回してくる。

「で、どうだった？」

「どつって、何がですか」

「決まってるだろ？ 会ったんだろ、七塚に」

……ああ、理解した。

「今日、俺に転校生の話をしたのも、彼女が俺の事を知っていたのも、全てアナタの差し金か。一回帰ったっていうのも嘘ですね」

「バレた？ それはさて置き、人聞きの悪い言い方をするなよ。オシはお前の為を思っているいろいろ根回ししてやったのにいー。お前、彼女いなかったらう？ で、どうだったよ？」

余計なお世話だっつもの。確かに俺にはいませんけど。楠とは友人だし、片岸は天然。3日前から我が家に居候している殊葩ことばは問題外。それ以前に人外。

「一回見た限りじゃなんとも。というより、俺はあんまり容姿を女子の採点基準に入れない主義なんで。大事なのはね、H E A R T はあーとなのですよ。エロい人にはそれが分かんのです」

「どんな名言もお前が言った途端に胡散臭く聞こえるよな」

「紛れもない事実だけど、それはエゴだよ。うん。」

「お待たせしました。あ、新宮さん、お久しぶりです」

奥の更衣室から現れた七塚の雰囲気が先程から随分と変わっていた。後頭部で纏まとめていた烏羽色からすばの髪は、癖一つ無く、下ろすと背中ほどまでであった。身長は楠より少し高い、166か7。俺とあんまし変わらない。服装が変わっても、凛とした雰囲気は失われていない。和風美人といったところか。

「……？ 私の顔に何か？」

俺の視線に気付いた七塚が尋ねてくる。自分の姿を確かめようと横を向く度に、ストレートの髪が流水のように揺れた。

「いんや、なんでもない。それよりも俺の事はさん付けじゃなくていいよ。敬語もナシ。同学年だしさ。普通に河野か、楠みたいに圭ちゃん、は流石に恥ずかしいな。闇と秩序と光と混沌の河野と呼んでくれてもいいけど。まあ好きに呼んでくれ」

「や、闇と……？ いえ、やはり河野さん、で」

結局それかい。堅苦しいのは嫌いなんだがな……。代わりに敬語はあまり使わないようにと、渋る七塚になんとか約束させた。

そんなやり取りを傍らで見ていた新宮が思い出したように声を上げる。

「七塚、そろそろバスの時間じゃないか？ 間に合うのか？」

「あ、はい。新宮さん、騒々しい挨拶になってしまってますいません。河野さんが、噂どおりの面白い人で安心しました」

新宮がそれは良かったと頷いていた。なんなんだ噂って。

俺は気になるし全然良くないんだが。新宮がどんなふうに俺の事を話していたのか不安だ。

「河野さんは、明後日に学校で。分からない事が多くて迷惑をかけると思うけど、何か困った事があった時はよろしくお願いね」

「暇な時ならね」

「はい。では、失礼します」

取り残された俺と新宮は、しばらく七塚の後ろ姿を見送っていた。俺もそろそろ帰って夕食の支度をしなければならぬ。殊葩だけでは留守番が不安過ぎるので、楠にも頼んであるが、早く帰るに越したことはない。

「なかなかいい雰囲気だったんじゃないか？ ん？」

まだ言っているのか、アナタは。相手をしていると切りがないので、適当に返す。事務のおっさんに挨拶して、俺はさっさと武道館を後にした。転校生の話は楠への土産話くらいにはなるだろう。

群青の空には点々と星が出始めていた。ふと、連休中の課題に全く手を着けていないことを思い出す。怪我の所為で、なんて大した言い訳に使えそうもない。仕方ない、明日は一日部屋に籠もることにしよう。

終わってみれば黄金週間とは言っても実に短いもので、休みが明けて登校してきた生徒達からは「課題の量が多くて終わらなかつたぜー（泣）。中間テストがヤヴァイよう」や「伊豆の温泉に家族で旅行に行ってきた。混浴だって聞いたから期待してたのに……ばーちゃんばっかりだなんで……」（号泣）」などといった、それぞれの近況が聞こえてきた。

来週から始まる中間考査や、季節外れの転校生である七塚紗心の

噂話は、あれほど校内を騒がせていた藤原惟と浅間研明の話題を強引に忘れさせた。生徒は疎か、遅れて課題を提出に行った職員室でも、浅間の友人だった小田にさえも。まるで、活力を失い不必要になった皮膚組織を、垢として流してしまふように。藤原惟と浅間研明の話題は触れえざるモノのように、どの場所からも抜け落ちていた。

かく言う俺も、日頃の行い（授業態度）が祟って、補修授業と中間考査、殊葩という新しい家族（厄介者）に振り回されることになり、藤原と浅間に関する疑問も、忘却の彼方へ行ってしまった。ちなみに、転校したての七塚紗心はぶつちぎりで学年トップを奪い去り、楠はバッチリ補修や再テストを回避していた。裏切り者ツ！まあそれは置いておこう。真面目に勉強しなかった俺が悪いんだし。家に帰ったら、このところ起動すらしていなかった『狩猟生活』を再開するのもいいな。多分、K a r z はもう居ないだろうけれど。

学校の帰り、本屋に寄っていたら日が暮れた。以前に比べれば日が長くなった方だが、それは俺の嫌いな梅雨と夏の到来の前兆であり、鬱。

家の玄関先に到着すると、玄関の扉が十数センチだけ独りで開いた。視線を下げると、殊葩が顔を半分だけ覗かせていた。殊葩は俺の姿を確認してから、ドアを完全に開く。

「おかえり、なさい」

「ただいま、殊葩。ちゃんと留守番できたか？」

殊葩は肯いて、俺の鞆を受け取る。俺が靴を脱ぐ間も、黙って俺の隣に立っていた。

最初は口々に喋ることも出来なかった殊葩だが、俺と楠の苦労もあり、ここ数日で膨大な数の言葉を覚えていた。

いや、正確に言えば、言葉を思い出したといった表現の方が適当

だろう。殊葩は、何も知らない赤子のような状態だと俺と楠は思っていた。しかし、俺が『教えて』やるのではなく、念じて『示し』てやると、その度にできる事が増えていく。つまり、殊葩は何も知らないのではなく、指示されなければ自分の持っている知識を使う事が出来ない、知識の使い方が分からない、ということらしい。

なんと言えば良いか……。俺自身、まだよく分かっていないのだが。

例えるなら、リンゴが好きなお子供は「好きな食べ物は何？」と尋ねられれば「リンゴ」と答える。だが、殊葩の場合は「好きな食べ物は何？」と尋ねられても、リンゴという言葉が何を指しているのか分からない。つまり返答しようがない。そこで俺の登場。俺が念じてリンゴのイメージを殊葩に転送。リンゴというのは基本的に赤くて丸くて、大きさは直径約十二cm、甘味酸味芯の部分は渋いなどなど、リンゴはこういうモノだといった情報を、俺と殊葩の間に繋がったテレパシーで指示してやる。これで初めて、殊葩はリンゴという言葉が何を指しているのか理解するのである。

俺と殊葩の間に繋がったテレパシーは、そういった物事の『概念』で対話するものらしい。俺はこのテレパシーを”*Imagin* アイエル *ggs Link* (概念通話)”と呼ぶことにした。略してIL。

こいつを上手く使えば言葉の食い違いによる誤解がなくなり、より確実に、より速く相手に自分の意思を伝えられる。手っ取り早い話が『これ・それ・あれ』のみで会話できるのだ。そこには国の言語の違いも問題にならない。最大の問題は俺と殊葩にしか繋がっていないということか。

着替えや料理を作っている間、俺なりにこの二週間いろいろ試してみた結果を脳内で纏めてみた。俺にしては上出来。

夕食、何

ホラ来た。俺は自分の憶測が正しいことに気を良くして『オムラ

イスだよー』と殊葩に教えてやった。殊葩は眉一つ動かさず、椅子に座って俺の様子を見ていたが、コイツだって感情が無い訳じゃない。確かに表情の変化に乏しいし、まだまだ使える言葉も少ない。そのため、外観だけでコイツの感情を判断するのは難しいが、エシで繋がっている俺には、ほんのり喜びと期待の感情が伝わってくる。ケチャップライスを薄焼きの卵で優しく包み、皿に移して上から適当にケチャップをかけて完成。同時進行で作っていた鶏のスープと一緒に食卓に並べる。殊葩は完成したオムライスを見つめていた。犬なら涎を垂らすか尻尾を振っているに違いない。

そんな様子を見てみると、自然と頬が緩んでいた。あるええ？俺って子供嫌いじゃなかったっけ？

「いただきます……」

「はい、おあがりなさい」

殊葩が匙スプーンでオムライスを口に運ぶ。静かに咀嚼し、小さな喉を鳴らし、呑み込む。俺は目を逸らさずに見守る。

「……おいし」

「そうか、良かった」

料理を作る者として、やはりこの一瞬が一番嬉しい。俺も自分の分を口に含む。うむ、見た目も上々、塩加減もよし。これなら及第点だな。

殊葩が手を止めていた。庭に出るガラス戸が開いていたのだ。

「……窓」

「窓じゃない、戸だ」

換気の為に開けておいたガラス戸から冷たい空気が流れ込んできた。寒かったのだろう。俺は立ち上がり、締めに向かう。

戸の前まで来ると、急激な悪寒に襲われた。庭の茂みから、爛々と四つの光点が俺に向けられていた。殺気。なんだ、あれは。分らない、が、目を逸らすと、瞬き一つで、間違い無く殺られる。脇腹に重い衝撃。俺の居た空間を貫き、室内に飛び込んできた黒い塊。殊葩が横手から俺を突き飛ばし、俺を救った。

この感覚は、あの時の藤原と浅間と同じ……！

侵入者の姿を目視しようとするが、そいつは巨体の割に敏捷な動きで、覆い被さる俺と殊葩に跳び掛かってくる。見えたのは象牙色の乱杭歯。

俺は殊葩を抱えて飛び退く、事がこの体勢では出来ない！

俺の身体に乗っていた体重が消え、代わりに影。殊葩が俺と侵入者の間に立っていた。その左手は拳。鈍い音と共に倒れる殊葩の身体。俺はそれを必死に受け止める。視界の端に映ったのは、影がガラス戸から庭に落ちていく姿。まさか、弾いたのか、今のを……この、細腕で？

考えている暇は無い！俺は殊葩の手を掴んで、玄関に隠しておいたバットケースを担ぐ。

俺が玄関を出た所で、先の四つの光点が待ち構えていた。奴は殊葩ではなく俺を狙っている。殊葩が玄関を出る前に後ろ手で施錠。殊葩が扉を開けようとするが、当然ながら開かない。加速を付けて光点を飛び越え、叫ぶ。

「着いて来い！」

予想どおり、奴は俺を追ってきた。俺は夜の柴賀市へ飛び出す。人目の無い、広い場所へ！

冷たい水で肌に付着した血を洗い流す。衝撃で手が痺れ、なかなか言うことを聞いてくれなかった。

ＩＬで殊葩の無事を確認。置いてきた殊葩が心配だったが、合流する必要は無かったようだ。俺は安堵と疲労の息を吐き、地面に尻を落とす。

振り返ると、双頭の巨犬の死骸は原子レベルまで分解し、塵とな

って夜の柴賀市へ散っていった。流石の奴も、頭を二つとも潰されれば絶命するしかなかったのだろう。何なんだよ、一体。

藤原と浅間の件はあれで終わったと思いでいた。しかし、悪夢はまだ終わっていないかった。それどころか、何も解決していないではないか。藤原と浅間の話題が学校から消えたのも不自然過ぎる。二人が消え、その家庭がどうなっているのか、疑問を持たない方がおかしい。悪態を垂れたい気持ちを抑えて、立ち上がる。殊葩の知識は、ひよっとしたら藤原惟から引き継いだものなのではないだろうか。それなら、まだ殊葩が知っている記憶があるのかもしれない……とにかく、一旦帰ろう。俺はバットケースを拾い上げ、鉄挺子^{パール}を納めて歩き出す。

「河野、さん？」

公園を出た所で、突然に声を掛けられた。物音に敏感になってるんだから、止めてよホント。声の主は噂の転校生、七塚紗心だった。ラフな服装から散歩、だろうか。

「七塚？ 何でこんな所に？」

「こんばんは。私、この近くに越してきたんですよ。今夜は星が綺麗だし。散歩」

「星、ねえ……」

俺は空を仰いだ。

「貴方こそ、どうしてここに？」

「俺は、その、ジヨギング」

口が裂けても怪物退治など言える訳がない。そんな事を言った日には、間違い無く黄色い救急車を喚ばれてしまう。やや無理な応えかと思っただが、七塚は納得したようだった。

「そういえば、私が柴賀東へ来てから、ゆっくり話す機会が無かったわね」

「まあ、何かと忙しかったし、特に用事も無かったからね」

俺と七塚の間を、強い、湿った風が抜けていった。

「もう梅雨の季節、か。嫌な季節だ」

「そうね」

「話し方、随分軽くなつたな」

「そう?」

七塚が警戒を解いてくれた合図だろうか。悪い気はしない。ただの時間が流れる。夕食がまだだったことを思い出した。腹減つた。

「そろそろ帰りますね。あんまり遅くなると父が煩いので」

「なら、俺も帰ろう。機会と話題があれば学校でも話すだろうよ。じゃあな」

「ええ、おやすみなさい。また明日」

当たり障りのない挨拶で俺は七塚と別れ、しばらく月を見上げていた。やがて梅雨が来て、あの鬱々とした風が吹き始める。やがて夏が来て、課題の量に苦悩する日々が来る。その頃には問題もいくつか片が付いているだろうか。

行き着く先が答えなのか、行き止まりなのか、俺は知らない。楠や殊葩となら、退屈せずに歩いていけるだろう。そのことに不満はない。

俺はゆっくりと薄暗い夜道を歩き出した。

9・やがて黒南風の駆け抜ける季節へ（後書き）

えー、稚拙な文章を読んでくださり、ありがとうございます。
MRBです。

今回は物語全体から見ればほんの問題提起の章になります。第二部『憂いの曇天と涙雨に抱かれ、貴女は』ではメインヒロインが交代、楠遥香から殊葩と七塚紗心になります。

まあ、第二部というよりは、後編という目線で見たほうが、第一部の文章量的にはいいかも。

（裏話）

自分の願いが叶わずに散った藤原惟ですが、彼女の娘である殊葩、その名前には『向日葵のように、一際美しい花が咲くように』という願いが込められているのです。『殊』は【一際、特に】、『葩』は【ぱっと咲いた花】を意味しているのですよ。

藤原惟が大切にしていた向日葵の髪留めのように、と。

そして、よろしければ感想なぞ頂けたらなあ……なんて。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7478c/>

月さえ亡い鬱ぎでも、貴女となら（最初期）

2010年10月8日13時46分発行